

平成 23 年度 修士論文

日中の小学校における学校
文化の比較研究

三重大学大学院教育学研究科
学校教育専攻学校教育専修
210M011 娜布琴花

目次

はじめに	p、2
第一節 問題意識	
第二節 研究対象、研究方法及び対象の設定	
第一章 学校文化のとらえ方	p、8
第一節 学校文化の定義	
第二節 先行文献の概観	
第二章 日本における学校文化の実態	p、16
第一節 S小学校の学校文化の特徴	
第一項 S小学校の紹介	
第二項 S小学校における地域とのつながり	
第二節 S小学校のカリキュラム	
第一項 「活動・体験」学習への取り組み	
第二項 S小学校における授業実践及び分析	
第三章 中国における学校文化の実態	p、37
第一節 H小学校の学校文化の特徴	
第一項 H小学校の紹介	
第二項 H小学校における民族文化の伝承	
第二節 H小学校におけるカリキュラム	
第一項 学校の授業の開発	
第二項 H小学校における授業実践及び分析	
終わりに	p、52
第一節 本研究の到達	
第二節 今後の課題	

始めに

第一節 問題意識

社会や経済の発展に伴う都市化や生活様式の変化などにより、子どもたちの生活環境が変化しつつある。そのため、子どもたちは、自分の地域文化や民族文化と触れることが少なくなってきたといった状況である。このような問題を解決するためには、学校で伝統文化を子どもたちに伝えていくことが有益ではないかと考えられる。なぜなら、子どもたちが地域や民族の固有の伝統文化を受け継ぎ、発展させていくことは地域文化、民族文化の振興につながると考えられるからである。更に、子どもたちは、この文化伝承の活動を通し、将来社会で生きていくための必要な力を身に付けることができるのではないかと考える。

また、学校は社会の中存在しているため、独立したものではない。学校外の様々な要素からも大きな影響を受けている。友田泰正（1990、p4）は「文字を中心としている教科書の世界や、それを通じて行われる教育実践の中にも、それぞれ文化がある。その文化には、近代的な工業化社会に共通する科学的知識だけではなく、それぞれの社会特有の伝統文化が反映している」と述べている。つまり、学校が子どもたちに伝えているのは、単なる知識の寄せ集めではなく、その国や地域、民族の伝統文化も反映されているということであろう。それで、これらの外要素の影響を受けて、学校独自の文化が生じると考える。

黄順姫（2002、p87）は「伝統の継承は過去の文化、過去の繁栄を現在の学校のなかに生き残らせる過程である。現在によって再生、変容、再生産された伝統のみが、学校的時間・空間の中で価値あるものとして存在しつづけるのである」と述べている。つまり、学校で文化伝承をすることによって、伝統が価値あるものとして存在しつづけるということである。

筆者は日本のS小学校と中国のH小学校で授業観察を行った。両学校は校舎から、学校の活動まで全く異なった雰囲気である。しかし、子どもたちに何かを身に付けてあげようと工夫している教師たちの姿は同じである。では、教師たちはどのような価値観をもち、学校の活動と取り組んでいるのだろうか。

また、学校文化比較研究においては、学校文化というタイトルで、日本とアメリカ、日本とイギリスの研究がある。例えば、白井博の「認識と文化アメリカの学校文化・日本の

学校文化」、志水宏吉の「学校文化の比較社会学、日本とイギリスの中等教育」などが挙げられる。日本と中国の学校文化比較研究は未だ行われていない。

本研究で、学校を学校文化（価値観や行動様式）という観点から把握し、学校生活の中で大事にされている地域文化や民族文化に焦点をあて、それらを学校で伝承していく価値を明らかにする。同時に、日本のS小学校が文化伝承について学校でどのように取り入れ、一方、内モンゴルのH小学校で文化伝承について学校でどう取り入れていくべきかを考察していきたい。

さて、本論文は三つの部分からなっている。第一章では、本研究の基礎的な理論、学校文化の捉え方や先行研究の分析を行う。第二章では、日本のS小学校の学校文化の実態を学校文化の特徴、カリキュラムから述べる。第三章では、H小学校の学校文化特徴、カリキュラムから述べる。終わりは、本研究の到達点と課題である。

引用文献：

- 友田泰正『学校文化—深層へのパースペクティブ』 長尾章夫、池田寛編 東信堂 1990年
- 黄順姫『学校システム論（子ども・学校・社会）』竹内洋編 放送大学大学院教材 2002年

第二節 研究対象、研究方法及び対象の設定

一、研究対象

日本：

三重県S小学校 52人である。

中国：

H小学校約600人である。

この二つの学校を研究対象にした理由は、両学校で先人が創り上げてきた人々の伝統的な文化を子どもたちに伝承することを大事にしている点では似ているからである。

二、研究方法

本研究は、S 小学校と H 小学校での授業観察及び H 小学校の C 教頭先生、S 小学校の R 校長先生、N 先生に許可をもらい、インタビューを行った。また、S 小学校の合同検討会での資料により、分析を行った。その理由は、筆者だけの解釈にならないことに配慮したことがある。また、観察して筆者が気付いてない部分があるので、インタビューや検討会を通して、より深く知りたくなったこともある。特に、研究対象の価値観、行動、視点などを知りたいと思ったからである。

無藤隆ら (2004, p173) が述べているように「事例に関する多面的な情報や状況の詳細な提示は、データの妥当性を確認する意味でも有効である。他の視点からの解釈との突き合わせ、複数の種類の情報を重ね合わせることを通して、事例研究の妥当性を確かめる」ことを行うためにも、本研究においても方法を授業観察やインタビューを使用する。

(1) 観察

日本：

筆者は 2010 年 10 月から現在まで S 小学校の 1 年生や 5,6 年生を対象に授業観察を行ってきた。基本的には、毎週月曜日 1 限目から 3 限目終わりまでの 3 時間の授業中の観察を行う。時間帯は 8 時 40 分から 11 時 25 分で、合計 2 時間 45 分の観察である。さらに、学校行事として、体験活動が設定されている日も参加し、子どもたちとかかわりながら、田植え活動、すみがく活動（子どもたちの感性を磨く活動）、商店街集会活動（子どもたちは料理のお店やゲームをするお店を出すこと）等の児童の体験活動を一緒に行ってきた。ある時、都合を見て、4 限目の授業まで観察し、お昼子どもたちと一緒に給食を食べるときもある。

本研究で、一年生の「蚕の飼育」、「田植え活動での子どもたちの感想」を取り上げ、事例分析の対象とする。S 小学校では、総合的な学習、生活科の授業で、蚕飼育、田植えなどの体験活動を取り入れている。地域の昔からあった伝統文化を学校のカリキュラムの中で取り入れ、伝承させていくための S 小学校独自の学校文化だと思われる。

中国：

H 小学校での観察は、2011 年 9 月 19 日（月）から 9 月 22（木）までの、四日間の授業観察である。本研究で、4 年生の習慣（モンゴルの遊牧文化である衣・食・住文化のこと）の授業である「ゲル文化」の授業を取り上げ、事例分析の対象とする。内モンゴル全体から見ても学校のカリキュラムの中に民族独特な文化を取り入れる授業はほとんど見られな

く、本学校の教頭先生の話（第三章、第二項）から見ても、この学校は内モンゴルで有数の民族文化を学校で大事にし、取り入れている。

①観察者の立場

筆者は両校で授業観察をするとき、身の置き場所を工夫し、現場に迷惑にならないように心がけた。S小学校では、N先生の願いで、授業中子どもたちと直接かかわった場合もある。特に、体験活動を子どもたちと一緒にやってきた。山本登志哉（2004、p69）によれば「自分もその場面の自然な役割を担う、構成員の一人として振る舞うという関わり方で、そのフィールドの中にもともと予定されている役割をとり、その役割を通して対象者と関わるのである。これを参与的観察とか関与的観察などと呼ばれる」ことである。したがって、本研究での、筆者の立場を参与観察と言える。

②観察・記録方法

筆者は授業観察をするとき、教師や子どもの発言、様子をメモ書きながら、エピソード記録をとった。現場の教師の許可をもらい、ICレコーダーを使い、音声記録をとった。また、デジタルカメラを使い、写真を撮った。

(2)インタビュー

①インタビュー対象

日本：

S小学校でのインタビュー対象はN先生とR校長先生である。

中国：

H小学校のインタビュー対象はC教頭先生である。

① インタビュー時間及び場所

日本：

R校長先生へのインタビュー時間は2012年1月23日（月）の8時50分から9時20分（約30分）で、場所は校長室である。

N先生へのインタビュー時間は、2012年1月23日（月）の10時25分から10時45分（約20分）で、場所はS小学校の放送室である。

中国：

C教頭先生へのインタビュー時間は、2011年9月22（木）の二限目の休みの時間9時50分から10時10分の間で、合計20分である。場所は教導処（小学校部、三階）である。

下記の表は筆者が日中両国で行ったインタビュー、授業参観及び合同検討会での期間である。

国	期間	参観日時	インタビューの日時	合同検討会の日時
日本		2010年10月から 現在まで	R 校長先生 2012 年 1 月 23 日 (月) の 8 : 50 ~ 9 : 20 の (約 30 分) である N 先生 2012 年 1 月 23 日 (月) の 10 : 25 ~ 10 : 45 の約 20 分である	2011 年 7 月 22 日 (金) の 12 時半から 14 時半までの約 2 時間である
中国		2011 年 9 月 19 日 (月) から 22 日 (木) までの四日間である	C 教頭先生 2011 年 9 月 22 (木) の二限目の休みの時間 9 : 50 ~ 10 : 10 の合計 20 分である	なし

③記録方法

筆者はインタビューする際に、インタビュー어의許可をもらい、ICレコーダーを使って、音声記録を取った。

④インタビューの種類

本研究は半構造化インタビューを用いた。筆者が事前にインタビューへの質問を設定してあるが、話の中で確認や授業見た感想などを言い、課題を変え観察して気づけなかった点も知った。

(3) 合同検討会でのデータ

年間 2 回学期末に S 小学校の教師と M 大学の教員、授業観察者が合同で検討会(振り返りの会)を行われている。本研究で、事例解釈の妥当性や信頼性を高めるため、現場の教師からのコメントを大事にし、活動の理解を深めた。第二章、第二節で取り上げる「蚕飼育」

活動の記録は、S 小学校で行った合同検討会で検討したことがある。筆者が授業観察中、見たものや感じたことの意図を現場の教師たちから聞き、理解を深めた。(渡邊芳之 2004、p61)は「複数の視点からの観察は整合性よりもむしろ差異を検出するための方法であり、視点の違いが生み出す差異が総合されることから対象へのより深い理解が得られることがある」と述べている。

三、対象の設定

日本：

この活動は 2004 年 4 月から始まり、7 年半にわたって学生の参加観察を軸としながら協働の研究が継続している。

また、S 小学校は、筆者の所属している大学から車で約 40 分の離れているところにあるから、近くて便利である。

中国：

H 小学校は筆者の地元の学校であり、車で 1 時間離れているところにある。観察中姪に世話をしている伯母さんの家で宿泊した。(姪は H 小学校の一年生である)

引用文献：

無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ「編」『質的心理学 創造的に活用するコツ』 新曜社 2004 年

同上

同上

第一章 学校文化のとらえ方

第一節 学校文化の定義

本論文で取り扱う課題は「学校文化」である。学校文化について論じる前に「文化」という概念を理解する必要があるだろう。

『日本の新教育社会学辞典』（1986、p767）では文化を次のように定義している。「ラテン語の“colere”（気をつける）（養育する）（耕す）に由来し、“cultura agri”（土地耕作）を経て、“cultura”（耕作、動植物の培養育成、人の心の培養、教育）から転じたものとされており、この概念は最初から「教育」と相即不離だといえる。漢語としての「文化」は、「文治教化」（刑罰威力を用いないで人民を教化すること）の意味であったが、「文化」という日本語は、大正期に流行翻訳語として広まった。要するに、文化は、単なる〈自然〉ではなくて、人によって耕されたもの、作り出されたものであり、また普遍性をもつ市民的・都市的〈文明〉とも区別されて、民族を基盤単位にして構成された、しかもそれ独自の価値を実現している意味の体系ないしは生活の様式だと理解しうるであろう。概括的にいえば、文化とは、一つの社会集団の特徴的な生活様式であり、また、歴史的に生み出された生活のデザインだともいえる。行動とのかかわりで考えれば、既成の状況規定のセットのことである。つまり、ある社会を特色づけるような、しかも幾世代にもわたって伝承されてきた、ものの考え方や行動の様態を指す概念である。」

『教育大辞典』（1998、p1619）では「文化は人類が歴史過程中に創造した物質財物と精神財物の総合である。この言葉はラテン語の「cultura」から由来している。もともとは耕作、培養、教育、発展、尊重の意味があった。狭義では、特に社会意識形態及びこれと相適応した制度、機関などだ」と定義している。

中国の学者である鄭金洲の収集した文化の定義は310個を超えている。鄭金洲（2000、pp2-4）は文化を広義と狭義から次のように定義している。「広義の文化は後天的に獲得した、一定社会の集団に共有した事物で、一般的に緊密関連している三つの層面がある。つまり、物質層面、制度層面と精神層面である。狭義の文化は一定社会集団が習得、共有する一切の観念や行為である。」

このように、文化についての人々の理解は様々である。それでは、両国では学校文化を

どのように捉えているのだろうか。

先に、日本の学校文化についての定義を概観する。

『新教育社会学辞典』(1986、p117)では、学校文化を次のように定義している。「学校集団の全成員あるいはその一部によって学習され、共有され、伝達される文化の複合体。学校文化は次の三要素からなる。1)物質的要素：学校建築、施設・設備、教具、衣服等、学校内で見られる物質的な人造物。2)行動的要素：教室での教授=学習の様式、儀式、行事、生徒活動等、学校内におけるパターン化した行動様式。3)概念的要素：教育内容に代表される知識・スキル、教師ないし生徒集団の規範、価値観、態度。学校文化は学校という組織ないし制度が普遍的に有する文化項目としての性格と、それらが各学校の歴史や社会的文脈の中で独特の展開を示す中で形成された特質の、双方を併もつ。各学校の伝統ないし校風と呼ばれるのは、後者の側面が強調されたものである。」

『新社会学辞典』(1993、p206)では、「学校集団の全成員あるいはその一部によって学習され、共有され、伝達される文化の複合体。学校という組織ないし制度が普遍的に有する文化項目としての性格と、それらが各学校の歴史や社会的文脈の中で独特の展開を示すなかで形成された特質の、双方を併せもつ。学校文化は全体社会の下位文化であると同時に、それ自身、①生徒の下位文化②教員の下位文化③いわゆる制度的下位文化(教育課程・方法、校則、儀式等)からなる。狭義の学校文化は、制度的下位文化を指す」と定義している。

『教育社会学辞典』(1967、p155)では、次のように定義している。「学校という制度ないし社会集団のもつ下位文化である。この文化の構成要素にはおおむね三種があげられる。第一種は学校が公的なインスティテューション(institution)として、その伝達(及び創造)の任を負っているところの文化。この文化は教育課程として生徒へその発達段階に応じて与えられた、生徒たるものの行動規範あるいは道徳として揚げられる。第二種の要素は文化的、心理的、身体的な未成熟者たる子どもに特有な文化である。第三種の要素は、教師集団の文化である。それは、一面では、文化遺産の公式の伝達者、学校社会の秩序の維持者のもつ文化であると共に、多面では、子どものよき理解者、養育者のもつ文化である。」

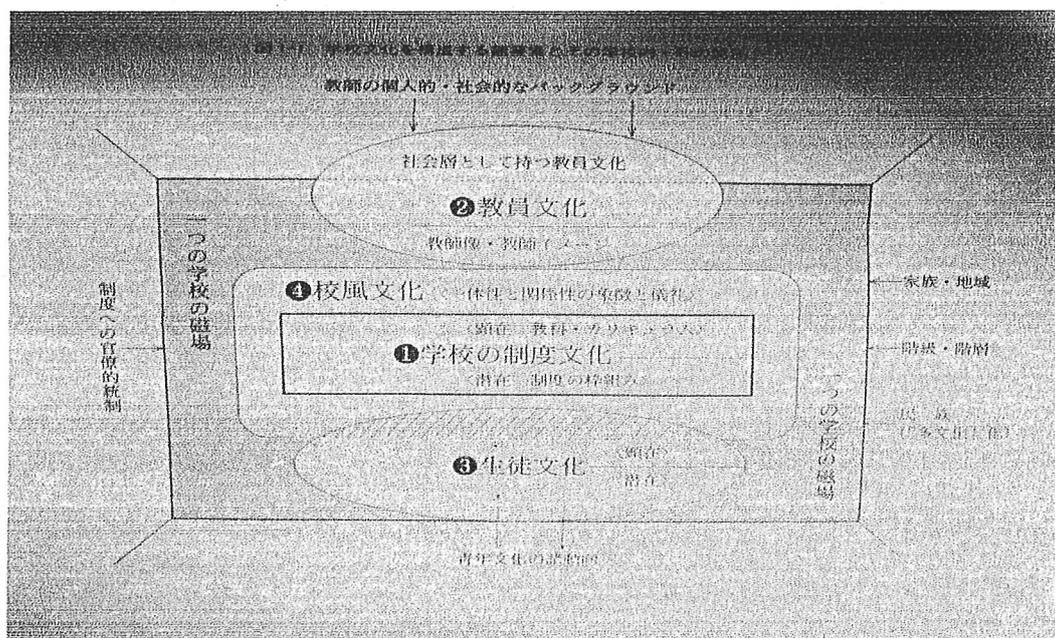
上記で紹介したのは、日本の辞典での学校文化に対する捉え方である。それでは、研究者たちはどのように捉えているのだろうか。

志水宏吉(1990、p17)によれば、学校文化は「ものや情報などの具体的なものごとでは

なく、それらの背後にあって、それらの物事や人々の行為一般の生成に関わるきまり・ルールのことであり、この原理を体得することによってのみ、学校社会の中で自由に生きることができる」と定義している。

中留武昭 (1996, p40) によれば、学校文化は「各学校に固有のものとして形成されている規範、習慣、価値、信念や行動様式などの認識枠組み」を意味している。そして、このような学校文化は顕在化した文化と目には見えにくい潜在化した文化があると述べている。

久富善之 (1996, pp16-20) によれば、学校文化を構成するものとして、大きく以下の4つがあると述べている。つまり、制度文化、教員文化、生徒文化、校風文化である。これらの四つの要素は相互に作用しながら学校文化を構成している (図)。また、学校文化の構造と性格とは、内在的諸要素とその相互関係によってのみ成り立っているのではなく、当然ながら外在的諸要素との関係も重要である。したがって、学校文化は学校内で完結したものではなく、学校外の様々な要素からも大きな影響を受けていることが分かる。本研究で、特に注目するのは、学校外である地域や民族から影響を受けて学校成員に共通して見られる価値観や行動様式である。



(学校文化を構成する諸要素とその学校内・外の関係)

次に、中国の学校文化の定義を概観していく。

『教育大辞典』(1998, p1834) では、学校文化は学校内の教学及び他の一斉活動の価値観や行為形態を指すとしている。学校の物質文明と精神文明の総合的な表れで、顕在的力

リキュラム、潜在的カリキュラムからなると書かれている。

吳支奎（2008、pp20-23）は、次のように定義している。「学校文化は学校の発展過程で段々形成されてきた組織成員の基本的仮設、信念、及び安定的な生存方式である。それが、学校組織成員の共同で遵守する価値体系と行動モードに表現する。」

劉学国（1990）¹³は学校文化を「学校の構成員が、一定の社会歴史環境中、共同の目標を実現するため、段々形成された観念形態と文化形式の総合である。この中に価値観、行為様式、道徳規範、心理校風、学校精神と学校形象などが含まれている」と定義している。

付云（2006）は、「学校文化は学校の成員が学校の文化伝統を継承する基礎上、長期の教育実践過程中、積み重なり、創造されてきた。全体成員の認識を基礎とし、学校の現象、雰囲気及び行為モードなどに表している」と定義している。

上記に示したように、両国に行っている学校文化の定義から見れば、学校は一つの文化的な場所であり、価値的、行動的要素を含んでいるという点で共通している。しかし、日本の場合は、学校文化は、学校の内外からの影響を受けているというニュアンスが強い。これに対し、中国の場合は、学校の中で形成されていることを強調している。

以上の定義を踏まえ、筆者は本研究で、学校文化を次のように定義する。すなわち、学校文化とは「学校で大事にされ、長い間受け継がれてきている価値観や行動様式」である。

引用文献：

- 『新教育社会学辞典』日本教育社会学会編 東洋館出版社 1986年
顧明遠（代表）『教育大词典』上海教育出版社 1998年
鄭金洲『教育文化学』人民教育出版社 2000年
『新教育社会学辞典』日本教育社会学会編 東洋館出版社 1986年
『新教育社会学辞典』東洋館出版社 日本教育社会学会 1986年
『新社会学辞典』有斐閣 1993年
『教育社会学辞典』日本教育社会学会編 東洋館出版社 1967年
志水宏吉『学校文化—深層へのパースペクティブ』長尾章夫 池田寛編 東信堂 1990年

中留武昭（代表）『学校改善を規定する学校文化の要因に関する調査 ―校長に対する意識調査の結果から』教育経営 教育行政学研究紀要 1996 第 3 号
久富善之『学校文化という磁場』講座学校第 6 卷 柏書房 1996 年
顾明远『教育大词典』上海教育出版社 1998 年
吴支奎『校本課程開発と学校文化再建』江蘇教育研究 2008 年
劉学国『浅論学校文化と学校建設』教育理論と実践 1990 年 第 6 期
付云『学校文化簡論』現代中小学教育 2006 年第 4 期

第二節 先行文献の概観

第一節において、学校文化の定義を述べたが、本節で、日本と中国で行っている学校文化についての先行研究を概観していく。

先に、日本の学校文化研究から述べていく。

一、日本における学校文化研究

西田芳正（1990、pp123-144）は、研究対象として漁業を主産業とする地域を取り上げている。この地域では、一般地区と異なる特徴的な言葉や行動のパターンが見られる。西田は「差別のために一般地区住民との接触が閉ざされていたためであるが、同時に、漁業という地区の産業に根をおろした地域文化という性格を持つものである。そして、この地域文化が、この地区の学校教育が抱える問題を考える上で鍵となる要因となっている」と述べている。

この地域の特徴として、西田は「全世帯の約三分の一に当たる 130 世帯が漁業によって生計を立てているということである。肉体労働従事者の占める割合がきわめて高いということである。また、部落差別の厳しさという問題がある」と述べている。西田は、子どもたちの姿は、地域に受け継がれてきた文化を体現するものだと考えている。これは、社会的接触の緊密さという上記の要因と密接に関連していることと、差別による外部社会との隔絶であることが原因になっている。

西田の研究は、一つの地域を事例とし、生活基盤が漁業などの肉体労働であるという事情が、地区の独特な文化を支え、また、差別という経緯が文化の変容を妨げたということを明らかにした。

また、ある中学校の実践記録から探求とコミュニケーションをキーワードにする授業雰囲気を書き、この協働で創り上げていく主体的な学びが、様々な教科で、継続的な時間の中で繰り返され、学校に根付き、学校文化そのものになっているという研究もある。

千々布敏弥（1996、pp21-29）は、実際に学校現場を変革している校長が、学校文化をどのような枠組みで捉えていたかを明らかにした。斎藤喜博氏の作品である「学校づくりの記」を取り上げ学校文化の認識枠組みを事例分析した。千々布の研究は、実践的有効性を追求するためには学校文化という視点が有効であろうという仮説の元に考察が行われた。千々布の研究が、学校改善、学校独自の教育課程の創造にも有効に機能するのではないかと考えられる

二、中国における学校文化研究

中国における先行研究では、「校園文化」と「学校文化」という二つの概念が使われている。「学校文化」という概念は、研究者たちの中で使われ、教育現場ではあまり耳慣れてない。「校園文化」と「学校文化」について、研究者たちは、次のように述べている。

陈新文（2008）は「校園文化研究は基本的に学生を対象とした校園の研究であり、そして校園文化を校園環境と解釈している。この傾向は学校文化の理論的構造及び学校教育の実践には不利な影響を与える。学校文化は校園文化より範囲が広いことと校園が学校の組織範囲に属している」と指摘している。

また、付云（2006、pp4-6）は、「学校文化と校園文化はイコールではない。現在、学校文化に関する多くの文章では、二者(学校文化と校園文化)を混乱させている二つの普遍的現象が存在している。一つは、学校文化は校園文化であり、言い方が異なっている。現象である。もう一つは、学校文化という題目で、内容は校園文化になっている」と指摘している。

つまり、「学校文化」と「校園文化」は同意語ではない。校園文化は学校文化の中に属している重要な部分であると理解できるだろう。

筆者は「校園文化」をキーワードとし、中国 CNKI（日本の CINI と似ている）論文の絞り込みを 2000 年から 2010 年までとし検索した。すると、題目に「校園文化」が入っている中国优秀硕士学位论文論文が 265 個で、博士学位論文が 1 個、国家科技成果論文 1 個があった。つまり、現在も校園文化という視点から研究が行われているということである。

また、「学校文化」を題目として、中国 CNKI で検索すると、1995 年から 2010 年の 15 年

間に学校文化に関する研究文献は 3288 個、このうち、2000 年から 2010 年の 10 年間の研究は 3089 個である。この数字から、この 10 年間の研究成果は全研究の 90%以上を占めていることがわかる。すなわち、近年学校文化研究が盛んに行われ、たくさんの研究者たちが注目しているということである。概観しておけば次の通りである。

彭彦琴ら（2009）は、蘇州市 A 小学校を事例とし、如何に自分の文化背景を利用し、学校文化を建設するかについて、物質文化、行為文化、制度文化の方面から分析を行った。何長平（2006）は、現代中小学校学校文化建設の意味、建設の挑戦、建設の策略について述べている。钟丽芳（2008）は、広西の L 中学校を事例とし、教師文化、生徒文化、課程文化という三つの側面を取り上げ、民族学校の学校文化の分析を行った。孟静（2006）は、学校文化建設の客観と必然の視点から、学校文化の機能、素質教育と基礎教育過程改革の三つの観点及び持続発展の観点、学校文化の生成、内包、建設意味、創建の理論と実践について述べてきた。

陳明媚（2006）は、理論的に少数民族学生に本民族の歴史文化教育を強化することの重要性を述べている。劉茜、邱遠（2010）は、多様化の課程形式を利用し、民族文化を学校で伝承すべきだと述べている。

3、日中両国における学校文化研究の相違点

日本の先行研究の場合は、地域性を強調しているように思われる。これに対し、中国の場合は、民族性を重視しているように思われる。

引用文献

西田芳正『学校文化—深層へのパースペクティブ』 長尾章夫 池田寛編 東信堂 1990 年

学びを抱く「探求するコミュニティ」第 1 巻 『学びあう学校文化』 福井大学教育地域科学部附属中学校研究会 2010 年

千々布敏弥『学校経営実践記録における学校文化の認識枠組みに関する考察』

教育経営教育行政学研究紀要 1996 年第 3 号

陳新文『学校文化研究的历史考察—中外比較的視角』 荊門職業技術学院学報 教育學刊 第 23 卷 第 1 期 2008 年

付云 『学校文化簡論』現代中小学校教育 2006年

彭彦琴 江波 詹艶 『学校文化建設の思路と模式—蘇州市A小学校学校文化建設を事例として』(期刊) 教育科学研究 2009年12期

何長平『現代中小学校学校文化建設研究』江西師範大学 2006年

孟静『学校文化建設：現代学校發展の新方向』山東師範大学 2006年

钟丽芳『民族学校の学校文化透視—広西L中学校を事例として』広西師範大学 2008年

陳明媚『論強化少数民族学生の本民族歴史文化教育の必要性』黔西南民族師範高等専科学
校学報 2006年2期

劉茜・邱遠『論学校課程で民族文化伝承機能の実現』中国教育学刊 2010年 第7期

第二章 日本における学校文化の実態

第一章において、日中両国に行われている学校文化研究について紹介した。本章では、日本の小学校文化の実態を実際の学校現場に学校文化がどのような特徴を持っているか、学校のカリキュラムでどのように取り組んでいるかというこの二つの面から具体的に検討していきたい。

第一節 S 小学校の学校文化の特徴

第一項 S 小学校の紹介

S 小学校は、明治 9 年(1876)に創立され、明治 32 年(1899)に現在の位置に校舎が建てられた。教育の使命を 130 年以上担ってきた歴史がある。今の校舎は 2 棟の木造で、昭和 29 年(1954)に建築され、50 年以上が経過し、平成 21 年 8 月 7 日(2009、8、7)に国登録有形文化財に登録された。この文化財に登録されたことは、S 小学校をずっと将来にわたって残していこうということである。現在、児童たちが学校生活を送る校舎としては、全国的にも数が少ない古い校舎である。

S 小学校は、三重県 K 市の北西部に位置し、周りに田んぼ、川、山があり、豊かな自然環境に恵まれている。このような、豊富な自然環境や保護者・地域の方の協力により、子どもたちを様々な自然体験や社会体験に参加することができている。体験活動の中心には、田植え体験、商店街集会活動(子どもたちは料理のお店やゲームをするお店を出す活動)、親子ふれあい活動、稲刈り、すみがく活動(子どもたちの感性を磨く活動)、つくしの家との交流(障害を持つ人と交流する活動)、ジャガイモほりなどがある。

平成 23 年度(2011)現在、1、4 年生は単級、2～3、5～6 年生は複式学級で、全校児童数は 52 名、教師数は 12 名の小規模校である。平成 17 年(2005)から小規模特認校制度が実施されて、現在 14 名の児童がこの制度により、登校している。小規模特認校制度とは、人数が少ない学校での通学区域外からの入学・転学が認められている制度である。S 小学校では、K 市内に住所がある人、また将来住所を移す予定のある方で、恵まれた自然環境の中で、少人数教育を希望される児童や保護者が、正規の学校区から特別に S 小学校への入学ないし転学を認めるという制度ととらえている。

S 小学校の教育目標は「～であい ふれあい そして未来へ～自分を発揮し求め続ける白川っ子の育成」である。目指す学校像は「一人ひとりの子どもが輝く学校」である。地域の伝統を大切にするとともに、新しい考えを取り入れ、よりよい雰囲気醸し出す小学校を目指している。

平成 23 年度において S 小学校は以下のような「学校経営のねらい」、「重点目標および具体的行動計画」を掲げている。

〈学校経営のねらい〉

子どもの生活全体にゆとりを持たせ、子どもが主体的に活動できる時間を確保する。家庭・地域・学校が相互に連携しながら、豊富な自然体験、社会体験を通して、自ら学び考える力や豊かな人間性を育む。

〈重点目標及び行動計画〉

重点目標：

S 小学校の重点目標は「～であい ふれあい そして未来へ～自分を発揮し求め続ける白川っ子の育成」である。

さらには、平成 23 年度における「重点行動計画」として、以下を提示している。

- 1、学習に取り組む意欲を養い、基礎的な知識・技能を全ての子ども身に付けさせる。
- 2、子どもが、知識技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力をつける。
- 3、共に生きる大切さが分かる子を育て、豊かな人間性を養う。
- 4、保護者・地域・三重大学などとの連携を強めることである。

学校経営のねらいで、家庭・地域・学校の連携を大切にしている。また、豊富な自然体験、社会体験を通して、自ら学び考える力や豊かな人間性を育むと示している。それでは、学校側はどのように地域とのつながりを大切にしているか。また子どもたちの自ら学び考える力や豊かな人間性をどういうふうに育てているのだろうか。このことについて、下記の S 小学校における地域とのつながりで教師へのインタビューにより明らかにする。

第二項 S 小学校における地域とのつながり

学校が地域とつながることがどのような意味や価値があるのだろうか。

日本教育基本法第 13 条において「学校、家庭及び地域住民そのほかの関係者は、教育に

おけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」と規定されている。

学校教育法第 43 条には、「小学校は、当該小学校に関する保護者及び地域住民そのほかの関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該小学校の教育活動そのほかの学校運営の状況に関する情報を積極的に提供するものとする」と規定している。

また、第 15 期中央教育審議会は平成 8 年 7 月の第一次答申「21 世紀を展望したわが国の教育のあり方について」の中で「教育は、言うまでもなく、単に学校だけで行われるものではない。家庭や地域社会が、教育の場として十分な機能を発揮することなしに、子どもの健やかな成長はあり得ない。[生きる力]は学校において組織的、計画的に学習しつつ、家庭や地域社会において、親子の触れ合い、友達との遊び、地域の人々との交流などの様々な活動を通じて根づいていくものであり、学校・家庭・地域社会の連携とこれらにおける教育がバランスよく行われる中で豊かに育っていくものである」と提言した。

以上から分かるのは、学校がその目標やねらいを達成するためには、地域の人々とつながり、学校内外が連携して児童を育てていくということを強調していることである。長尾彰夫(1990、p94)で「学習指導要領が日本の学校文化のあり方を大きく拘束し、規定するものとして存在している」と述べている。

それでは、日本の学習指導要領で学校と地域のつながりについて、どのように述べているのだろうか。具体的に示せば、(1999、p21)「各学校においては、法令及びこの章以下にしめすところに従い、児童の人間として調和の取れた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成するもの」とする。

「地域や学校の実態を考慮するという事は、各学校において教育課程を編成する場合には、地域や学校の実態を的確に把握し、児童の人間としての調和のとれた発達を図るという観点から、それを学校の教育目標の設定、指導内容の組織あるいは授業時数の配当などに十分反映させる必要があるということである。

学校は地域社会を離れて存在し得ないものであり、児童は家庭や地域社会で様々な経験を重ねていくことで成長している。地域には、都市、農村、山村、漁村など生活条件や環境の違いがあり、産業、経済、文化などにそれぞれ特色をもっている。このような学校を取り巻く地域社会の実情を十分考慮して教育課程を編成することが大切である。とりわけ、学校の教育目標や指導内容の選択に当たっては、地域の実態を考慮することが大切である。

そのためには、地域社会の現状はもちろんのこと、歴史的な経緯や将来への展望など、広く社会の変化に注目しながら地域社会の実態を十分分析し検討して的確に把握することが必要である。また、地域の教育資源や学習環境（近状の学校、社会教育施設、児童の学習に協力することのできる人材など）の実態を考慮し、教育活動を計画することが必要である。

なお、学校における教育活動が学校の教育目標に沿って一層効果的に展開されるためには、家庭や地域社会と学校との連携を密にすることが必要である。すなわち、学校の教育方針や特色ある教育活動の取り組み、児童の状況などを家庭や地域社会に説明し、理解を求め協力を得ること、学校が家庭や地域社会からの要望に応えることが大切であり、このような観点から、その積極的な連携を図り、相互の意思の疎通を図って、それを教育課程の編成、実施に生かしていくことが大切である」と示している。

ここで示しているように、学習指導要領では、学校と地域の関係を親密にしていこうということが理解できる。それでは、S 小学校が地域の状況に応じて、どのように取り組んでいるのだろうか。まず、S 地域の実態から見ていくこととする。

① S 地域の世帯数・人口の変化・推移から

住民基本台帳によれば、S 地域に該当する世帯数や人口の変化・推移は次の表に示している。

世帯数の変化

平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年
293	295	302	313	318

この表から分かるのは、本地域の世帯数の移動は、年々増えているのは現状であり、地域を離れ、流出する傾向がある。

人口の変化

平成 2 年	平成 12 年	平成 19 年	平成 22 年
1100	970	896	871

この表から平成 2 年の段階で 1100 名であったのに対し、平成 22 年の統計では 871 名に変わり、この 20 年の間で、230 名程度減少していることが分かる。

また、この地域で少子高齢化が進行しているのは現状である。昭和 10 年頃は子どもたちが多かった。昭和 30 年頃は 250 人ぐらいたが、平成 24 年現在は 52 名の子どもたちが在籍している。つまり、S 地域の子どもの人数は激減しているということが分かる。

平成 22 年の住民基本台帳によれば、60 歳から 109 歳間の人口は 368 名であり、総人口 871 の 35 パーセントぐらいを占めていることを分かる。すなわち、高齢化が進んでいるということである。

② 農業から

この地域はかつて養蚕も盛んであり、地場産業の生系の生産等とも結びついていたが、絹の需要が激減したことを受けて飼養農家も激減して、今ほとんどなくなっている。農業は、経営耕地面積、産出額ともに縮小傾向しているのは現状である。かつて学校周辺地域ではそば作り、米や麦などの農業が盛んに営まれていたが、現在ではその一部を残すに留まっている。

以上の状況から分かるのは、S 地域では、世帯数・人口数がだんだん減っているし、また農業が縮小傾向しつつある。これらの状況を踏まえて、S 小学校は、どのような意図・価値から、どのような取り組みをしているのだろうか。本学校の地域とつながって、行われている活動から検討してみよう。

高島秀樹（2008、p230）は、「地域ごとには、その独自の文化が存在している。この場合の文化は各々の地域社会がおかれている自然的条件と歴史的背景に対応する、生産活動から生活の仕方に至る広い範囲に及ぶ、抽象的な意識から具体的な行動様式までを含む独自のあり方を意味する。このような意味での文化はその地域社会での生活を可能にするために必要であるという意味を持つとともに、地域社会の独自性・存在価値を象徴するものでもあった。伝統的な地域社会においては、このような地域社会の文化は生活・生活体験を通して、意図的に働きかけなくても次の時代に受け継がれ、世代を超えて存在されていた。しかし、生活様式など様々変化により、地域社会独自の伝統的な文化が伝承されにくくなっている。それで、伝承のために学校で意図的な活動、地域とのつながりが必要になってきている」と述べている。

筆者は、下記の表のように、地域と様々な活動・行事を通じてつながりを持っている S 小学校を 2010 年の 10 月から今まで週に一回度の継続的な参与観察や学校行事を通して、活動を行ってきた。実際には、下記の表で示されている活動以上に、S 小学校の活動は多く行われている。例えば、卒業式、運動会、フリー参観、地域の独居老人訪問、特養老人ホーム介護体験などがある。

S 学校の一年間で行われている主な行事や活動

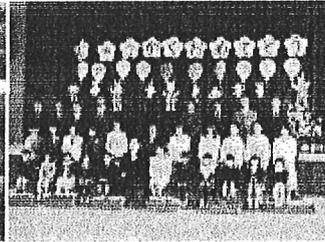
4月 入学式	蚕のできた繭でコサージュを作り、新一年生を迎える。
5月 親子ふれあい活動 田植え	ゲーム、リズム運動などを行なう。 地域のSさんに田を貸していただき、全校児童で苗を植える。
6月 蚕の飼育 ジャガイモ掘り	一年生が牛場さんの指導を受けて蚕の飼育が始まる。 地域のHさんの畑にて、全校児童でジャガイモを掘る。
8月 ソバ種まき	3・4年生の子どもが、地域のUさん指導の下、ソバの播種を行なう。
9月 稲刈り	Sさんの指導により、米の収穫をする。
10月 ソバ刈り取り サツマイモ掘り	8月に播種したソバを収穫する。 地域のSさんの畑にて、全校児童でサツマイモを収穫する。
11月 ソバ脱穀、製粉、製麺	地域のUさんらの指導の下、10月に収穫したソバを脱穀し、製粉から製麺まで行なう。
12月 商店街集会	つくし家の人や地域の人々、M大学の学生、教員が参加する。子どもたちはお店を出してゲームコーナーを作る。



親子ふれあい活動



田植え活動



入学式



ジャガイモほり



商店街集会活動



S 小学校では、なぜ地域のつながりを大事にしているか、また、先生方はこのことをどのように捉えているのであろうか。

そこで、R 校長先生や N 先生のインタビューにより、活動のその意図や価値を明らかにする。

先に校長先生のインタビューを取り上げる。R 校長は本学校に校長として来られて、2 年目である。10 年ほど前には、本学校で教頭先生の仕事をやっていた。R 先生にインタビューを行った理由は以下の通りである。校長という視点から、学校と地域のつながりをどのように捉えているのだろうか。一般的に、組織や集団にとって、リーダー（管理職）の存在は重要である。学校の場合は、校長先生が教師や子どもたちの指導者で、学校の目標やねらいを達成するため、各場面で、影響を与えている。どのような、学校づくりを目指していくかが、校長の認識・価値と関連すると思う。このことについて、中留武昭（1996、pp39-84）は「実際と理想との識別は学校文化論的には前者が顕在化され、後者が潜在化された、いずれも文化と考えられる。特に、後者の理想は校長の規範や価値観と認識枠組みにほぼ該当するものと見てもよい」と述べている。

また、R 校長は本学校で、教頭先生の仕事も 10 年ほどぐらい務めていたので、学校だけではなくて、地域についてもよく知り得るのだと考えられる。次は、R 校長先生へのインタビュー記録である。

筆者：本学校での活動をとって、地域の人々が学校の活動によくかかわっていると感じています。どのような意図から参加していただいているのですか。地域とつながることについて、校長先生はどのように考えていらっしゃいますか。

R 校長先生：この学校は地域の中の学校なんさ。校区があつて、日本は小学校だったら、ここに住んでいる人は、この小学校。ここに住んでいる人はこの小学校というのは。昔からこの地域があつてここは、K 市の小学校やけど、昔は S 村という村だったのや。それで、村の中の小学校ということで、村で一つの小学校ということで、お年よりの方もみんなこの卒業生ということですので、学校と地域というのは別々もんでなくて、一体化したもんで、地域とつながりを持って始めて、公立学校の意味があると言うか、地域みんなのものである。学校はそういう意識でやっているから。地域の人によって、子どもたちが育てていくのだから、将来その子らが、この地域を強めていくし、地域からの人たちに育てられた子どもたちが世界に出ていって、自分の力を発見することが、教育力と

というのは、学校の教師がやっている分、たかだかが知れているわけで、家での教育、地域での教育が非常に大事で、そこで、立派な人間として育てられていくのだから。地域の教育力を学校で活用して子どもたちに、いろんな力をつけさせていこうとしているということである。

一緒に活動することによって、地域の人も子どもと触れ合うことができる。そして、子どもたちと活動することによって、地域の人も一緒に楽しめる。共に活動して、共に楽しんで、得るものがあるわけだから。楽しくなかったら、地域の人は学校にはきませんよね。子どもたちも地域の人に育てられているという。だから、子どもの教育というのは、学校の先生だけがやるものではなくて、絶対足りない。人間としての教育は、お家、保護者、家庭、地域、というそこで、育てられていって本当に、人間として立派な人間になっていくわけだから。地域には、様々な力を持って見える方がいるわけで、そういう方の力も利用していくというのも、学校教育の中で大事なわけで。大学でだての先生が、なお、教育学部を出て、子どもに教えるとたかだかが知れているって。

学校の活動で、実際に呼びかけているのは、地域全体だけど、実際にかかわってくださっていることがみんなやけど、、、現実的になかなか商店街集会ぐらいただと、学校に来てもらうことは少ないですね。本当はもっともってきてもらえるようにしないと、あかんだけど。このごろ地域の人が学校に来てくれるのは少なくなってきたかな。僕がここで、教頭しているときは、一年間で大体だけど、きちんと数えてないけど、千人ぐらいの人が学校にかかわっていましたよね。だから、千人というのは、一人の人が何回も来ている。例えば、ちょっと花壇作り、花つくる、畑つくる、野菜づくり、、、そういうことでも、地域の人の力を借りて、子どもたちと一緒に、野菜作ったり、花を作ったり、、、今は花作りを来てもらっているよね。野菜作りについても、地域の人がどんどん入ってきている。子どもたちの学習に地域の人の力を借りていたのだから、蚕の学習にも、借りたし、炭の学習にも借りたし、今だったら、そばの学習にきてもらっているし、それ以外、いろんな野菜を作ったり、花を作ったり、、、本当言うと、教室の国語や算数や理科の授業にも入ってもらいのやけども。なかなかそこまでは行ってないのは現状であり、もっともっては入ってきてもらいたいと思います。地域の教育力は一番大事ですね。学校よりも超えている。これは、S小学校だけではなく、いろんな学校にいろんな形でやっていると思います。

考察

「学校とつながりを持って始めて、公立学校の意味がある、学校はそういう意識でやっている」という言葉は、校長というリーダーシップの立ち位置から、地域とのつながりは学校運営・経営の柱だと意識していることが伺える。

子どもたちが社会で必要な力を見つけていくためには、地域の人々の教育力を借り、豊かな自然や様々な知識に触れ、関わることはなにより大切であることを強調している。ここで単なる親密な関係を超えて、地域と共通で子どもたちを育てていくという校長先生の価値・考えが伺える。

また、「教室の国語や算数や理科の授業にも、入ってきてもらいたい」というR校長先生の言葉から、地域の人材を活用し、より多くの人と出会うこと、交わることを積極面として捉え、できる限り授業へ反映させようという意図が伺える。また、この数年地域の人が、学校に来るということは少なくなっているが、地域の方にきていただければよいように学校側は働くべきだということ強調していることが分かる。

次に、N先生へのインタビューを取り上げる。N先生はS小学校に来られて4年目で、教師になってから36年も経っているベテラン教師である。N先生にインタビュー行うことを決めた理由は、教職経験が長い先生の捉え方を知りたかったからである。同時に、現場の先生の立場から学校の実態、雰囲気・様子や活動・体験についてどのように捉えているかを知りたいからである。また、毎週S小学校で授業観察を行い、主にN先生のクラス（1年生）を対象として、エピソード記録をとった。

筆者：本学校での活動をして、地域の人々が学校の活動・行事によくかかわっていると感じています。N先生は地域とのつながりについてどういうふうに考えていらっしゃいますか。

N先生：地域との連携・つながりについてですが、子どもは学校で育つのはもちろんですが、地域の中でも育ちます。たとえば、地域がやさしい地域ならば、子どもたちもやさしくなれますし、地域の人々が荒れていると、子どもたちも荒れていきます。例えば、地域の人の言葉遣いが悪いと、やっぱり、子どもも言葉遣いが悪くなっていきます。また、先生だけでは、できないことを地域の人に助けていただくということもあります。地域と学校はお互い様です。地域と連携・つながりがあると、子どもたちは地域や自分の故郷を大事にする子どもたちに育て行きます。故郷を大事にすると、大人になって、大学生になっ

て、よそのところに、よその県の大学に行っても、また社会人になって、遠く離れて、働いたとしてもやっぱり心の中には故郷を持っているし、また大きくなってから故郷へ帰って、故郷に役に立つ子になるというような、大人に育つかも知れません。そんな意味でやっぱり、学校と地域と子どもは、連携して、やっていかななくてはならないと思います。

考察

ここで、N先生は主に、地域の人々の子どもたちに与える影響、地域の人々の力を借りることの大事さ、郷土愛という心を育成することの大事さについて述べている。

子どものよい面も悪い面もその地域の強い影響下にある。したがって、子どものよりよい教育のためには、学校と地域のつながり・連携が大事で、協力し合って子どもを慈しみ育てるべきであることを示唆していると考えられる。

子どもを育つことは、学校の先生だけではできない部分があるから、地域の教育力を求め、活かしていくべきだと捉えていることが分かる。N先生の言葉では「地域と学校はお互い様」である。

また、N先生は子どもたちが、どのような場所へ行ってもS地域を大事にしていく、故郷を大事にしていく郷土愛についても述べている。子どもたちの学びの成果が故郷の繁栄と関連することも強調している。

学校の先生方は地域のつながりについて、上記のような考え・見方を持っているのだが、それでは、地域の人はこの点について、どのような思いを持っているのだろうか。地域の人々の強い意識や努力がなければ、学校とのつながりも難しいのではないかと考える。中西智子（2009、pp2-3）で、次のように載せている。（前コミュニティセンター会長打田さんの話より）

打田：学校があって、白木と小川がS校区としての学びの場になる。基本的には、学校が位置的にも全ての面でも接着剤的なものになっている。S小学校は200人位子どもがいた頃からうちの村の小学校ということで、いつも学校と地域はほとんど一緒に活動している。だから、文化財の指定を受けるときに、文化財の指定を受けたら、「もう学校は廃校にならへんの」というそんな感じの意見が多かった。

打田さんは学校が学びの場だけではなくて、位置的にも、全ての面でも、「接着剤」の存在であると言うのは、まさか、つながりのことを重視しているのではないかと考えられる。また、S小学校は200人いたころから今まで地域と共に活動していることから、地域との

つながりはS小学校に長く継がれて、もうS小学校の伝統になっていることが伺える。

同時に、S小学校が国登録有形文化財の指定を受けたら、「もう学校は廃校にならへんの」という意見は、地域の人々の学校が廃校になることに心配している気持ちを理解できる。つまり、言い換えれば、地域の人々は、S小学校の文化財に登録され保護・保存していくことを願っていたということが分かる。

以上のR校長先生やN先生のインタビューを通し、「学校と地域はお互い様」「学校は地域の中の学校」だからつながりを大事にしているという考えやまた地域の人々の教育力を借り、子どもたちのよりよい学びが深まっているということが分かる。

引用の前コミュニティセンター会長打田さんの話から地域の人々にも、学校とつながる強い意識を持っているということが分かるのではないかと思う。

引用文献

長尾彰夫、池田寛編『学校文化 深層へのパースペクティブ』1990年 東信堂

丁子惇（代表）『小学校学習指導要領解説総則編』東京書籍 平成11年

岡崎友典、高島秀樹、夏秋英房『地域教育の創造と展開』放送大学教育振興会 2008年

中留武昭（代表）『学校改善を規定する学校文化の要因に関する調査 一校長に対する意識調査の結果から』教育経営 教育行政学研究紀要 1996年 第3号

中西智子『133年間の歴史を活かして未来へ生き続ける教育へ—亀山市立白川小学校』「わかすぎ」機関誌 2009年 第125号

第二節 S小学校のカリキュラム

第一節において、S小学校の紹介と地域とのつながりについて述べた。本学校で、地域とのつながりをどうして大事にしているのかについて、校長先生やN先生のインタビューによって、本活動の意図や価値を明らかにしてきた。

長尾彰夫（1990、pp87-90）は「学校の教育目標を具体化していくものがカリキュラムであり、潜在的なカリキュラムが、学校において共有され、伝達される一定の態度や価値観としての学校文化に大きくかかわっている」と述べている。

本節では、前章を踏まえながら、地域と学校のつながりの架け橋になっているS小学校のカリキュラムから検討していきたい。実際の学校現場でどのような目的から、活動や体験を行われ、また、子どもたちはどのように、感じているかを学校のカリキュラムを通し、具体的には、エピソード記録やインタビュー、子どもたちの感想により明らかにする。

第一項 「活動・体験」学習への取り組み

第一節で述べたように、S小学校では、子どもたちをいろいろな自然体験や社会体験に参加させている。この活動を全校活動や学年ごとの活動に分けて行っている。全校活動には、すみがく活動、田植え活動、ジャガイモほり、サツマイモほりなどがある。学年ごとの活動には、内容的に各学年により違って、大まかに三つに分けられる。低学年の子どもたち(1、2年生)のテーマは、「みんなで蚕を育てよう」である。蚕を育てている期間に毎朝授業前に5～10分間蚕の世話や観察を行っている。3、4年生のテーマは「そば作り」である。そばの播く、そばの観察、そばの脱穀、そばのふるまいまでの一連の作業を地域の人々の協力により行っている。5、6年生のテーマは「福祉体験・勤労体験」である。つくし家の作業体験、特別用語養護老人ホーム介護体験などを行い、いろいろな人との出会いを大切にしている。

高橋勝(1992、p68)は「学校の生活空間をもっと子どもの感性、身体性、活動性を反映させたものにつくり変えていく必要がある」と指摘している。

森脇健夫(2000、pp25-26)は、「教育内容の〔科学性〕や〔真実性〕が必ず学びの内容を保障するものとはなりえない。カリキュラムの概念が従来の教育課程から学習経験の総体へと移り変わりつつあるのも、学校の中で一体どういうことが学ばれているのかに関心が移ってきたこともこの動きと無縁ではない。さらに、教育内容が教材構成や授業づくりにおいて、果たすべき役割(機能)が不明確になっている。文部省の新学力観の提起、それと即応する指導観の転換の提起を背景として生活科や「総合的な学習の時間」の新設によっていわゆる「活動・体験」が授業の中に主活動として導入されつつある。認識内容を目標とである手段としてではない。あくまでも「活動・体験」自体が目標である。そして、「活動・体験」をどう組織するかということが教材・授業づくりの焦点となった」と述べている。すなわち、学校においては具体的な「活動・体験」学習が大事ということを強調しているのである。

次に、R 校長先生や N 先生のインタビューにより、活動体験学習の意図・価値を明らかにする。先に、R 校長先生のインタビューを取り上げる。(2012 年 1 月 23 日のインタビューより)

筆者：授業観察を通して、本学校は活動・体験が多いと感じました。活動を通して子どもたちにどのような力が身に付けさせているのだと考えていますか。

R 校長先生：机の上の勉強では、やっぱり実体験ができやんもんで、体験活動というのは、非常に大事で、自分で考えて、自分で動いて、そして、体で覚えていくというのは、非常に大事なもんで、議論やいくつ分かっているも、なかなか身に入らないから、白川小学校では、できるだけ、直接体験をさして、様々な体験活動を小学校のときできることをやらせてあげて、それが将来、大人になったら、一生懸命自分だけやったことは、活かせるようにということでは体験を重視しています。頭で分かっても、何もできないからね。

考察

R 校長先生は、体で体験して、覚えること、実感することの大事さ、つまり、直接体験が何よりも大事だと考えていることが伺える。同時に、頭で理解することの不足点を指摘している。

また、今、S 小学校で、子どもたちに自ら考え、行動する体験活動をやらせていることは、将来に役に立つべきであると強調している。ここで、身に付けた力を活かして行くことは、これからの社会において重要だと R 校長先生は捉えていることが伺える。

次に、N 先生のインタビューを取り上げる。(2012 年の 1 月 23 日のインタビューより)

筆者：授業観察を通して、本学校は活動・体験が多いと感じました。活動を通して子どもたちにどのような力が身に付けさせているのだと考えていますか。

N 先生：学校の主に体験活動、授業じゃなくて、体験活動を通して、どのような力をでていくということについては、、まず、体験活動は家や学校の生活、つまり、日常生活ではできないことをやります。初めてのこと、新しいこと、一人ではできなくて、友達とやれることを経験します。それによって、、1、ものごとをよく見て観察する力、観察したり、気づく力 2、友達と協力する力 3、成し遂げるまで頑張る力、4、体験活動が終わった後で、感想を言ったり、作文を書いたり、絵で表したりしますから、表現する力、纏める力また、

5、その体験活動を支えてくださった人に、感謝する力などたくさんいろんな力はありませんけども、こういった力を育てていると思います。

考察

N先生の言葉で言えば「体験活動は家や学校の生活、日常の生活ではできないことをやっている」ことである。すなわち、体験できないことを地域の人々の協力をもらい、活動しているということを示唆していることだと思う。

そして、体験活動を通して、子どもたちに文章を書く力、観察する力、表現する力、纏める力など、いろんな力を身に付けさせているというN先生の考えが伺える。

以上のR校長先生やN先生のインタビューを通して、S小学校の体験活動は地域の人々の力を活かして行っていることと本活動自体が子どもたちの将来には価値があると考えていることが伺える。

地域の変化により、子どもたちに田植えなどの農作業、自然体験と触れることが少なくなっている中、S小学校では地域の人々の協力により田んぼを借りて、活動を続けている。今回の活動で、Hさんが田んぼを貸してくれた。それでは、活動の主体である子どもたちは、活動に参加してどのように感じているのだろうか。次は、子どもたちのノートから考察していきたい。

2011年5月8日（金） 田植え 一年生の子どもたちの感想文から

一年生の教室の後ろの壁にはみんな一人ひとりの田植えをしている時の写真と一人ごとの感想文を貼ってある。感想文の内容は次の通りである。

H君：今日、田植えに行きました。はじめ、入るとき、どきどきしたけど、慣れました。泥が手や足について面白かった。

Yちゃん：最初は冷たかったけど、どんどん楽しくなってきました。お餅月が楽しみです。

Aちゃん：今日、初めて田植えに行きました。お家には田んぼがないので、初めて植えました。こけそうだったとき、先生が手を貸してくれたので、こけませんでした。泥がついて面白かったです。

Aちゃん：今日、初めて田んぼへ行って田植えをした。田植えをしていたら泥がいっぱい付きました。

Y 君：田んぼで、水をばちや、ばちやして面白かったです。田んぼで苗を植えるのと、泥のところが面白かったです。

Y ちゃん：私は、今日田んぼへ行きました。最初は水が冷たかったけれど、ちょっとは慣れてきました。お餅つきが楽しみです。

H 君：今日、H さんに話を聞いて、田植えを上手にしました。いっぱい苗を植えて楽しかったです。えいきち君が手を貸してくれたので、こけませんでした。

H 君：僕は田んぼの中に入ると、足が抜けませんでした。足を上げると抜けました。お姉さんたちに感想を言いました。

S 君：お姉さんたちが世話をしてくれて嬉しかったです。

考察

S 小学校の田植え活動は、総合学習の一環として行われ、1年生から6年生まで、全員が参加している活動の一つである。一年で一回田植え活動をしているから、S 小学校では6年生まで、6回体験できることができる。

初めての体験で、面白かったという感想は、一年の子どもたちの初めて体で体験できたことを面白い、楽しいと受けて、確かめていることだろうと思う。

また、活動を通して子どもたちは、「水が冷たい、水がぼちやぼちや、泥がつく…」などの田植えをして感じたこと、感触を具体的に言葉で表現できていることが分かる。「誰々が手伝ってこけなかった」という感想文から、他人（先生や子ども）に感謝しているという気持ちが分かる。特に、「H さんの話を聞いて上手に植えた」ということは、H さんのおかげで、上手にできたという、地域の人のことを考えているのだろうと思う。また、「自分の家では田んぼがない」という言葉は、家の状況、つまり現実と関連して、ものごとを考え、学校が活動の場を創り、体験できたという思いが伺えるのではないかと感じる。

これが、R 校長先生や N 先生の考えている体験活動の価値、子どもたちに自分でもの、ことを考える力、感謝する力、表現する力など、将来に役に立つ力を育てている場面だろう。

引用文献：

長尾彰夫(1990)『学校文化—深層へのパースペクティブ』尾彰夫 池田寛編 東信堂 1990年

高橋勝『子どもの自己形成空間—教育哲学的アプローチ』川島書店 1992年

森脇健夫『学びのためのカリキュラム論』グループ・ディダクティカ編 勁草書房 2000年

第二項 S小学校における授業実践及び分析

筆者は上記のような、様々な社会体験や自然体験を子どもたちに参加させているS小学校を2010年10月から現在までにわたって、週に一度の継続的な授業観察を行い、エピソード記述を中心として活動を行ってきた。次に取り上げるのは蚕飼育の記録である。

臼井博(2001、p3)は、「学校や教室という場で営まれているすべてのことがその地域の文化と不可分な結びつきをしている。教室でなされている活動というよりも教室という場そのものが、紛れもなく一つの文化システムである。思うに、教室という場全体が物理的な構成と時間的な構成の両方において文化的な意味を伝えるようになっている」と述べている。つまり、学校や教室での営みは、地域文化と離すことができないということを強調している。

さらに、佐伯胖(1995、p30)は「〔教室〕での営み(授業)というのは、教室を越えた世界(現実社会、さらには、未来に広がる可能的世界)に向けての意味体系の吟味、享受、再構築を目指したものであるかぎり〔文化〕であると考えている。〔文化〕とするかぎり、未知なる世界に開かれた営み、常に過去の伝承と共に未来への新たな文化づくりの様々な実践が含まれていないといけないのである」と指摘している。

次に、S小学校1年生の蚕飼育のエピソードを取り上げる。

2011、6、13(月) 授業：国語 内容：くちばし 子ども：9人(男5人、女4人、欠席1人) 教師：N先生 時間：一限目(8：40～9：25)

背景：飼育している籠は教室の一番後ろのほうにおいてある。蚕飼育の間(5月、6月)は、いつも一限目の授業が始まる前にみんなで5～10分間の間蚕の観察をしている。下記に取り上げたのは、6月13日のエピソードである。筆者は授業が始まる2分ほど前に教室に入った。子どもたちは「土日になって、そんなに？蛾になったら卵生むや…」と蚕の話をしている。チャイムがなり、朝の会や健康観察を行う。その後、蚕飼育の活動が始まる。

先生の指示に従い蚕の世話をする子どもたち

8時42分

教師は、まず蚕を土曜日、日曜日に自分の家に持って帰ったことを説明する。その後、子どもたちに蚕のところに集合するよう指示をする。S君はなかなか蚕のところに来ない。他の子どもたちは、「yeah~yeah~」と楽しそうな声を出し、蚕のところに急いでくる。教師はS君に「S君こっちに来てね!」と声をかける。みんなが集まった後、網の話をする。子どもたちに「小さな網は今のところどうだろう?」と質問する。子どもたちは「蚕が入らへん、大きくなった…」と言う。教師は子どもたちの考えを聞いた後、網の交換をした。続いて、子どもたちに蚕の移動をさせる。子どもたちは葉っぱに付いている蚕を手で持ち新しい網のところに移動する。教師は子どもたちの様子をずっと見ている。気づいたことを教師に報告する子どももいる。教師はときに、「落としたりあかん」と厳しい口調で注意をする。最後に、教師は餌をあげるように、みんなに言う。S君は、ほかの子どもたちの桑をあげるのを見て、自分から桑をあげるとはしない。教師に「S君も餌あげてね」と言われ、S君は桑を持ってあげる。餌をあげた後、「早い、もう上がってきた」と蚕を数える子どもがいた。S君も「もう上がってきた?」と確認をし、うれしそうに蚕を見る。8時48分ごろに蚕観察は終わり、授業内容が始まる。

考察

N先生はいつも一限目の授業を始める前に、子どもたちに蚕の観察をさせている。なぜ、この時間にさせているのかを訪ねたところ、N先生は「もちろん、生活科の活動なんだけれども、蚕は毎日成長し大きくなっているの、毎日様子が変わっている。だから、前の日と変わったことは、すぐにその朝にやらなくてはいけないので、朝の時間にやっている。変化、変わったところを、気づかせるのと、それから、えさやりは毎日、朝やらなくちゃいけないので、朝やった」と話してくれた。このことから、N先生は蚕飼育活動を大事にし、国語の授業まで潰してやっていることが分かる。子どもたちに、蚕の成長を見守り、観察させる。そして、気付くことや生命の大切を実感させたいというN先生の気持ちを捉えることができるだろう。

また、この記録では、N先生がなかなか蚕のところに来ないS君に働きかけている場面や、子どもみんなに蚕を落とさないようにと気を付けるように声をかけている場面、また、みんなが餌をあげるができるようにと工夫している場面が分かる。ここから、N先生は子どもたち全員を参加させ、蚕のあつかいに気を配っていることが伺える。

このエピソードを筆者が年間2回学期末に行われているS小学校とM大学の合同検討会で発表し、現場の教師たちから、直接その活動の意図・価値を聞いた。このことについて、S小学校の先生方のコメントは次の通りである。ここで取り上げたのは、R校長先生とN先生のコメントである。

R校長先生：昔、日本は重工業が計画する前は、この地域はみんな家で蚕を飼っていたんだよ。S地域はお家で、そういう文化がもともとあるので、そういう面で、地域の伝統文化を、伝承していく役目もある。地域の学校だから、もともと持っていた文化をもう一度こう検証して、醸し出す。そういうあたりは、やっぱり地元のもともと持っているものを小学生に受け付けていこう。(2011年7月22日の合同検討会の記録より)

考察

「学校は地域の学校だから、地域の伝統文化を伝承していく役目がある」とR校長先生は捉えている。つまり、時代を担っていく、子どもたちに自分のS地域には、養蚕していた文化があったということや自分の生活している地域の歴史に触らせて、地域の伝統文化を伝承していくというR校長先生の願いが分かる。

このことを次に取り上げるインタビューからも明らかにすることができる。(2012年1月23日のインタビューより)

筆者：この前、行われた合同検討会で蚕飼育について、先生は「地域文化を伝承している」とおっしゃっていましたが、なぜ、学校でこの活動をやることが大切ですか。

R校長先生：蚕については、昔、各個にこの白川地域で、蚕を飼っているお家がたくさん多かったですよ。家の中で、一番いい部屋を蚕さんと言って、一番日当たりの部屋を蚕のために開放して、そこで蚕を飼っていたのです。そういう経緯があって、、、昔、その生糸の生産を日本はさえやっていたんで、、、それで、地域でも桑の木、そういう餌になる桑の木を育てていたんですけども、このごろ、そういうことをする家がほとんどなくなってきたんで、こういう地域文化を伝承していくということで、子どもたちに、本当の一部やけど、体験させています。実際には、この辺で飼っているところがもうないので、蚕の元の卵は群馬県から取り寄せています。桑の葉もほとんどなくなっていて、衣料センターの近所に桑の葉多木が今まで残ってはいんやけど。そこに、もらいに行ったりしています。それから、学校の校庭に桑の木を植えて、餌になるようにしているということ。それから、この

地域では、その生糸の生産を亀山製糸という会社がやっていたんです。そこに、牛場三吉さんという方が今まで見えて、実際には、ご指導にも来てもらって、授業を進んでいます。

前、私がいたときは、あのう、地域の人もみんな蚕の生産に、自分たちが若いころ、家には蚕があったんで、喜んで、子どもたちと一緒に蚕を育ててくれてたんですけど、この頃は、地域の人はあまり学校にきてない。前、教頭しとったごろは、炭焼きをしてました。そのときも蚕の飼育をやっていました。始まったのは、同じぐらいで12年前ぐらいかな。

(続きは、炭焼きについての話に変わる)

炭焼きは、あのう、地域で、昔からこちら山手屋なもので、炭を焼いて、それを生活費の足しにして見えた方がたくさん見えたんです。で、実際の燃料が炭から、ガスとか電気に変わっていて、炭の需要は減ってきて、そういう人は少なくなってきた。でも、あのう、実際にウナギを焼くとか、なんか熱量がガスに比べて、非常にしんのうほうまできれいに焼けるもので炭は。非常に長保されていて。小川炭サクールという地域の年よりのグループが実際に自分たちで炭焼きをされていたんです。自分たちでサクールを作って、炭を焼いて見えたんです。いい炭ができるもので、非常に評判もよかったもんだし。遠いところからも、わざわざ炭を買いに見える方がたくさん見えました。えー、学校も炭を作って、子どもたちが売っていました。一月の末に大市といって、亀山に市のイベントがあるんですけども、商店街で、その大市に白川小学校の子どもたちが、作った炭を出品したのです。それも、大変評判がよくて、皆さん買っていただいて、その後インターネットで販売していました。で、その炭を焼く方々がみんな年を経ることによって、炭を焼く前の原木、山から木を折ってこなければならない。で、それが非常に大変だということで、もう小川炭サクールはやめてしまいました。そういう指導される方が、みんなあまりにも90歳超えるとか、高齢化されていたので、学校の炭焼きも実際には動きが止まってしまったんです。今でも、炭焼きは運動場の端に残っています。で、現在は炭焼きをやめたもので、3、4年生はそばを作っていますよね、そばに変わりました。炭焼きからそばに変わりました。このサクールは地域のおじいさんやおばあさんのサクールです。その方々が中心になって、学校の炭焼きの指導もいただいたんです。

考察

かつて、S 地域で重要な産業であった蚕飼育は、生活が変化していくにつれて、衰退した。そんな中、養蚕の伝統文化を守るため、S 小学校では、蚕飼育活動に取り組んでいる

という R 校長先生の意図が伺える。

地域の桑の木を学校の校庭にも植えて、子どもたちの蚕飼育活動ができるよう、続けていくように、環境作りにも工夫しているところも分かる。特に、地域の人の協力を借りているところ、蚕飼育に詳しい牛場さんを学校に来て、指導をもらい、子どもたちによりよい蚕飼育の体験を充実させるため工夫していることも分かる。

また、R 校長先生は、S 小学校で行ってきた炭焼き活動がもうなくなったことに対し、子どもたちにいい経験をする機会が少なくなったと捉えている。

次に、N 先生のコメントを取り上げる。(2011 年 7 月 22 日の合同検討会の資料より)

N 先生：命の尊さ、大切、それから、できた繭で、卒業式のコサージュ、入学式のコサージュも作る。次の子、白川小学校の伝統つなげていくということもある。それから、二ヶ月間、毎日育てているので、その育てていることの喜び、蚕もこんなに 1 ミリの蚕子というのから、あんなに大きくなっただろう。ものすごく見てみて、毎日毎日成長するの分かるから、あのを、育て甲斐があるので、蚕の成長を見守る喜びとか感じられると思う。

それから、一日でも餌やらないと、もう死んでしまうから、きちんと二ヶ月間毎日餌やらないとあかん、ウンチを取らないとあかん、というような継続して毎日世話をするというよさや責任感を養うことにもなると思う。それから、観察カードを作って、発表したりするので、蚕をきちんと見るという、観察する目、観察感というのだけど、観察する目を養うことにもなる。だから、ぼやーと見ているのではなくて、じっと見て、絵を描いたり、気づいたことを文章にする。

考察

N 先生のコメントから、蚕飼育活動には、いろいろな育て甲斐がある。本活動で、たくさん意味・価値があるということが伺える。「子どもたちが毎日蚕の世話をする中で、様々な面での学習効果が期待される。蚕の成長を見守り、観察する。疑問を持つ、気付いたことを観察カードに記録して発表する。また、蚕の成長の不思議さや生命の尊さ、もの大切を実感する。このような体験学習を積み重ねることで、子どもたちに文章力、思考力、表現力などを身に付けることができる」と考えている N 先生の意図が伺える。これは、N 先生が一年生を担当して、子どもたちに本活動を指示しているから、活動の価値、子どもたちに身に付けられている力について、詳しいのだろうと感じている。

また、「次の子に、S 小学校の伝統をつなげていく」というところで、蚕飼育活動をこれ

から先も、S小学校に残していこうというN先生の考えが伺える。

以上の合同検討会での資料やR校長先生・N先生のインタビューから、明らかになったことは、蚕飼育活動には、S地域の養蚕していた伝統文化を伝承していくという価値・意図がある。また、地域文化を伝承していくと共に、子どもたちの観察する力、表現力などを身に付けているということが分かる。

引用文献：

白井博 「認識と文化」『アメリカの学校文化、日本の学校文化 学びのコミュニティの創造』 金子書房 2001年

佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『学びへの誘い』東京大学出版会 1995年

第三章 中国における学校文化の実態

第二章において、日本における小学校文化の実態、S小学校の事例を取り上げ、検討してきた。本章では、中国の小学校文化の実態について、H小学校を事例として取り上げる。学校文化がどのような特徴を持っているか、学校のカリキュラムでどのように取り組んでいるかというこの二つの面から具体的に検討していきたい。

第一節 H小学校の学校文化の特徴

第一項 H小学校の紹介

H小学校は中国・内モンゴル自治区のC市の東部に位置している。本学校は小学部と中学部が一つの校庭にあり、小中学校の校舎が離れている一つの科局級旗直属学校^(注1)である。変遷から言えば、小学校が1949年、中学校が1956年に創立され、2006年に小中学校が併合した。校舎の建物は二つあり、寮の建物が一つある。寮について付言しておく、内モンゴル自治区で子どもたちは、4年生から寮の生活を始めるのは普通である。4年生になると自分で身のまわりのことをこなすことができ、日常生活を送れるぐらいになるからである。特に、近年の学校併合によって、村の学校が閉校され、子どもたちは小学校低学年から、両親と離れて、寮に入るまで学校の近くに家を借りて暮らすというケースもでてきた。本学校も、例外ではない。4年生から、寮生活が始まる制度を実施している。

本学校はこの地域における唯一の九年一貫制の民族学校である。小学校に在籍している児童数は約580人、教師は52人である。近所のモンゴル子弟はみんな本学校に通学している。民族学校という名のあわすように、民族ならではの雰囲気を感じられる。学校の校庭から、教室・廊下まで、民族の生活を表した絵や歴史の有名な人物の紹介などが書(描)かれてある。これは、先人が創り上げてきた民族の伝統的な文化を子どもたちに伝承することを目指している。

2003年にH小学校では週一回度の「モンゴル習慣」(詳しくは第二節の第一項に述べる)の授業を開いた。教材となる教科書が4冊あり、H小学校の教師が作成した。内容としては、主に、モンゴル民族の伝統的な文化、習慣、生活等が書かれている。絵も描いてあるので、子どもたちには理解しやすい。2009年の2月に、この教材を内モンゴルの教育出版

社が上、下の2冊に編集し、内モンゴル自治区に分布した。そして、この教材がたくさんの人々に認められたことによって、内モンゴルのテレビ番組の中で、放送されたこともある。

また、「モンゴル習慣」の授業では、学校の校庭に二つのゲルを建てるということも行った。ゲルには、民族の伝統生活用品などを集めて、これをもとに教師は、子どもたちに授業を行っている。

授業観察を通して、子どもたちが多く発言している授業があった。子どもたちの発言が多くみられた授業というのが、本校の言葉で言えば、「10+30」^(注2)の時間である。特に、高学年のクラスでは、グループ活動を行っている。グループ活動では、1グループに一つの黒板を持たせている。(教室の壁には、いくつかの小さな黒板があり、教師の指示に従い使)黒板の上には、グループの名前や目標が書かれてあり、机の上に、グループごとの写真が置いてある。大体、6~8人が一つのグループに分かれ、顔を合わせて座り、授業をしている。

また、学校の生活を豊かにするため、授業外の活動である。〈Altanunag〉^(注3)を定期的に放送し、刊行している。〈Altanunag〉番組は毎日決めた時間帯に放送し、〈Altanunag〉雑誌が月に2回刊行している。番組では、児童や生徒の朗読を主とし、雑誌では、本学校の児童、生徒たちが書いた作文や詩を載せたりしている。

現在、本学校の校長先生を始め、教師や児童、生徒たちは努力し、人々に信頼される民族学校を建設するため積極的に取り組んでいる。このような努力があり、本学校は「市级学校文化建設先進単位」^(注4)「市级規範化民族学校」^(注5)「学校管理先進学校」^(注6)「市级素質教育実施学校」^(注7)等の名誉を得た。

注

ここで指す市はH小学校が位置しているC市のことを指している。市より上の等級は区級である。

注1 科局級旗直属学校：学校の等級を指している。本学校は、H鎮(小都市の称)に位置しても、鎮の政府から管理されていない。H鎮の政府と同等である。鎮より大きな旗の政府から管理している学校である。

注2 40分の授業時間の中、教師の教える時間を10分、児童の自分で勉強する時間30分に

していることを指す。

注3 Altanunag 番組と雑誌の名前であるこの言葉の意味は、日本語で一才の金馬を指す。

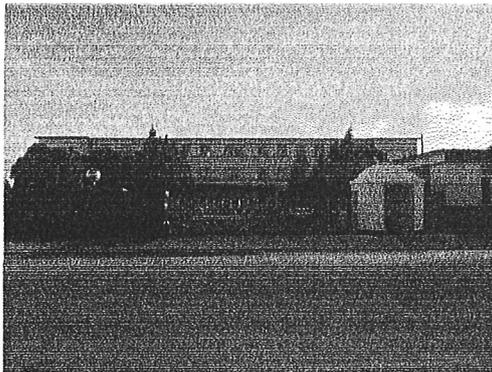
注4 市レベルの学校文化建設で優れている組織、先進している学校のことを指す。

注5 学校の施設から教師の素質（力量）まで、市のレベルの模範の学校。

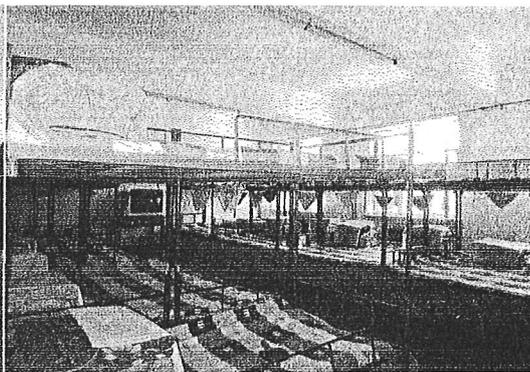
注6 学校の管理面では、先進しているということ。

注7 市レベルで、素質教育を実施している学校。

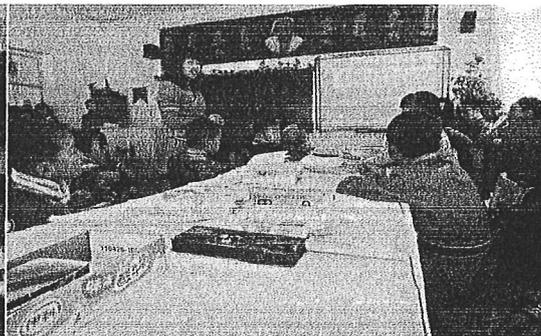
以下は、本学校で撮った写真である。



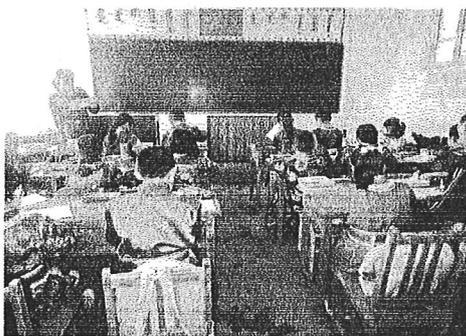
学校の門



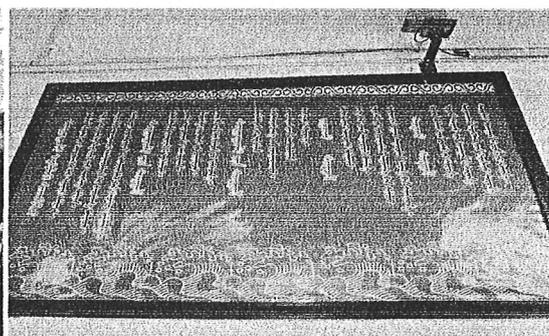
子どもたちの寮



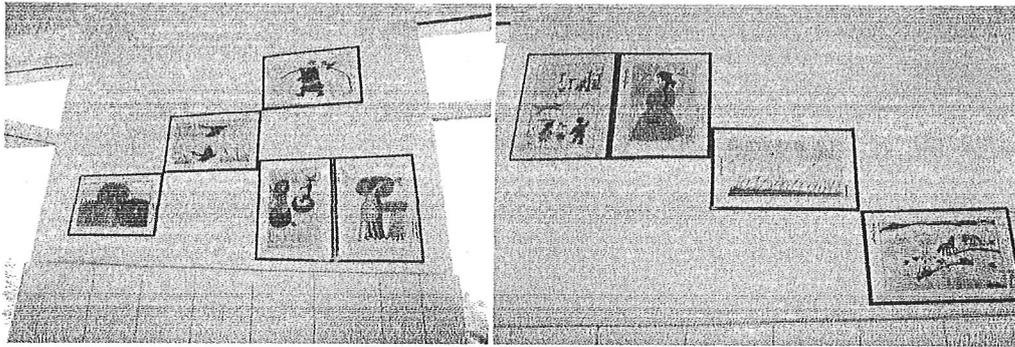
授業の様子



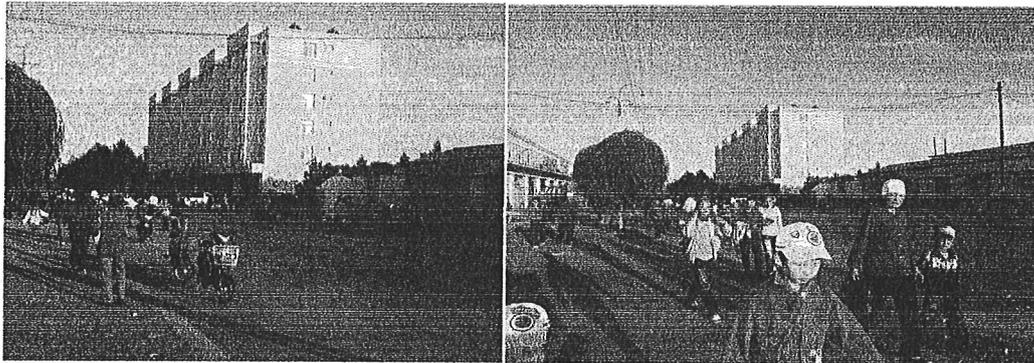
授業の様子



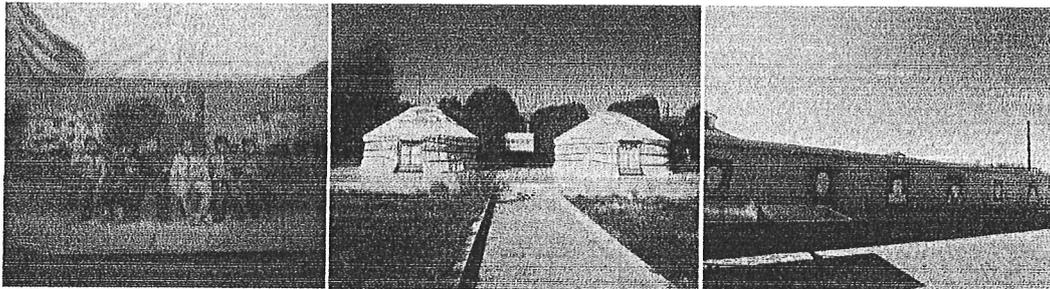
学校運営構想・教え・やり方など（下記）



廊下に貼ってある子どもたちの作品から



低学年の子どもたちを送り迎えの様子



グループの写真 学校の授業（習慣）を教えるゲル 学校の校庭から

上の写真で載せた本学校の学校運営構造・学校のやり方・教え・教育方針は以下の通りである。

学校運営構想

人格尊重を基礎とし、科学技術を依拠とし、科学管理を保証とし、優秀人材育成を目標とする。

学校のやり方

団結を重んじ、道徳を尊重し、知力に優れ、社会発展に適応する。

学校の教え

団結を重んじ、助け合いを強め、特徴を強調し、新しいものを創造する。

教育方針

人間としての尊厳を保って、身をもって手本を示し、教育内容を調整し時代に順応させ、学生に適応した教育を帆と施す。

第二項 II 小学校における民族文化の伝承

ここで、なぜ民族文化なのか。学校で民族文化を伝承することがどのような価値や意図があるのだろうか。ここで指しているのはモンゴル民族の文化である。

教育は国や地域、民族によってそれぞれ異なった文化背景のもとで行われている。多民族国である中国の教育もその中の一つである。

中国は、多民族国家であるため、教育も単一な漢民族教育ではなく、様々な民族言語、文字、文化を持っている多民族教育が存在している。これらの少数民族を対象にした教育を中国では「民族教育」と呼んでいる。少数民族が自民族の言語・文化を維持することは「中華人民共和国憲法」によって、各民族の権利として保障されている。

憲法の序言（1982）では、「各民族は一律平等、自己の言語、文字を使用し発展させる自由を有する」と定めている。

憲法の第六節（1982）では「民族自治区の自治機関は自主的に本地方の教育・科学・文化、衛生、体育事業、また民族の文化遺産の整理と保護、民族文化の発展と繁栄を管理する」と決めている。

それでは、今日の内モンゴルにおけるモンゴル民族の文化はどのような状態に存在しているのだろうか。ここで、人口、言語、生活形態の変化から検討していく。

(1) 人口から

内モンゴル自治区統計局の2010年公布した第6次の人口調査資料から見ると、モンゴル民族が422.6万人で、約17%を占め、漢民族が約81%、他の少数民族が2%を占めている。この人口比率からも分かるように漢民族が圧倒的数を占めている。モンゴル民族の比例が低いことから、主に、漢民族の文化が中心となっている。

(2) 言語から

民族言語は民族文化の大切な部分であり、民族文化は民族言語を通して伝承していく。しかし、内モンゴル自治区において、民族言語の消失は増えている。ここで、民族言語で授業を受けている人数の変化のデータを取り上げる。烏蘭図克（1997）によれば、内モン

ゴル自治区で1980年から1995年までのわずか15年間に、モンゴル民族学校の在校小学生が25643人、在校中学生が8663人減少して、モンゴル語で授業を受ける児童・生徒少数民族在校生総数に占める比例で見ると、それぞれ小学校が23、7%、中学校が20、2%下がった。つまり、モンゴル民族学校に通う人数がだんだん少なくなり、そのかわり漢民族の学校に通う子どもたちが増えているということである。

また、フレルバートル（1997pp91-105）では「1997年の時点で、内モンゴル自治区に民族語を完全に失った人口は29万人に達し、自治区総人口のモンゴル族の11.64%を占めている」と指摘している。

(3) 生活形態から

以前、内モンゴル自治区は、モンゴル民族が遊牧生活を営み、独自の生活様式を確立してきた地域であった。そのとき、遊牧生活に適応して、移動しやすいゲルで暮らしていた。しかし、現在では住むところを定着させ、ゲルを使用している人は、ほとんどいなくなった。ゲルは、観光地に残っているぐらいである。この生活様式の変化を黒崎未侑ら（2007）は「①都市化、工業化と第二次、第三次産業の発達②中国政府による経済政策の転換による家畜の私有化と牧畜民の定住化③漢民族の影響、の3つ要因による」と述べている。

以上の状況から、民族文化は急速に変化しつつ、危機的な状態の中存在していることが分かる。それでは、これらの問題を踏まえて、内モンゴルのH小学校では、どのような意図や目的から、どのような取り組みをしているのだろうか。筆者は、民族文化を大事にして伝承していこうと工夫しているH小学校で観察を行った。そこで、H小学校では、教頭先生のインタビューをもとに民族文化を伝承していくという、その価値や意図を明らかにしていくこととする。

C教頭先生にインタビューを行った理由としては、学校の管理職の場から見ると、教頭先生は、校長先生をサポートし、各教員への配慮、そして、学校の運営に関して知識をもっていると思われるため、今回、教頭先生にインタビューを行った。また、H小学校では、C教頭先生は子どもたちに習慣の授業も教えているため、普通の教師とリーダー両者の立ちに存在していると考えられる。次はインタビュー記録である。

筆者：学校の校舎から見れば、モンゴル生活を表した絵がたくさん見られます。私、中学校をここで勉強したのですが、その時、こういう状況は少なかったみたいです。

C 教頭先生：学校の中のこのモンゴル民族の特徴的な絵は昔からありましたが、民族の学校だから、民族の特徴を表しています。本学校の建てられた時間が長いから、前の古くなった絵を新しく描いているとか、他の新デザインの絵に変更しています。

この学校の中のゲルを 2008 年に建てられました。このゲルを学校の校庭に建てられた目的は、小学校には、モンゴル習慣(風習)という学校の授業が開かれています。主に、民族の習慣、民族の特徴、民族の生活など多方面を表した内容を教える授業です。中学校では同じく「ダリハンウルゲイ」(郷土)という学校の授業を開きました。このゲルは学校の授業を教える場所になっています。つまり、本学校の民族の伝統文化を教えるところになっています。学校は具体的なものを子どもたちに見せて、もっと深く理解して納得することを重視しています、人数が少ない学級には、ここで授業を教えている場合もあります。人数の多いクラスだったら、ここで全員入るのは難しいだから、各クラスに道具を持って行って教えるとか、何人かのグループ分け、ゲルの中を見せて教えたりしています。

筆者：どうして、この授業を開いたのですか。

C 教頭先生：漢民族の影響を受けて、すごく民族文化はなくなっているこの状況に向かってやりました。今の子どもたちは自分の民族文化を知っている人はほとんどいないし、民族文化は消失しているから。今、ほとんどの民族学校はこういう雰囲気になっているし、皆自分の特徴があります。私たちの学校も内モンゴル地域で、学校の授業を開き、いろいろ工夫し、優れている学校の一つです。

筆者：学校の校訓から見れば、「特色を發揮し、新しいものを創る」と書いてありますが、自分の特色がある学校を創るため、どの方面に努力しているのですか。この学校を代表しているものとかはありますか。

C 教頭先生：努力といえば、「習慣」の授業に力を入れています。ゲルの中には、モンゴル伝統衣装(服装、帽子、靴など)、モンゴル女性の髪飾りもの、馬頭琴、昔使っていた茶碗、馬に使う道具などたくさんあります。これを学校側がお金を払って買ってきたものもあるし、また学校の教師や児童の親の中、自分のを、学校にあげたものもあります。本学校を代表しているものと言えば、「習慣の授業」ですね。小学校部に、自分で編集し発行した習慣の教材が四冊あって、中学部では二冊あります。

筆者：子どもたちを授業外の活動に参加させていますか。例えば、田植えやとうもろこしなど。

C 教頭先生：全然参加させてないです。学校外に何か事故がある時、校長先生や教頭先生は責任を取るからやってないです、、子どもたちを具体的に活動や体験に参加させるのは、今後の生活上必要な力を身につけさせるので、いいですけど、万が一、何かあったら、校長・教頭先生は職を辞めさせる場合もあるので、校内が一番安心ですね。実は、子どもたちがずっと校庭の中、囲まれるのもいいことではない、（筆者略）

考察

「民族の学校だから、民族の特徴を表している」というC教頭先生の言葉は、民族の学校だからこそ、本民族の特徴を表すのは自明のことではないかという価値観を持っていることが伺える。また、民族意識が高いということも伺える。これは、教頭という管理職の影響を受けていることと、習慣の授業を教えているからかもしれない。

C教頭先生の「今の子どもたちは自分の民族の伝統文化を知っている人はほとんどいない」という言葉は、民族の生活形態が変わって、日常生活の中で、自分の目を見て、実際に体で体験する機会がなかったことを示唆しているだろう。同時に、習慣の授業の開きや教師たちが自分で編成した教材のことから、民族独自の歴史・伝統・文化を子どもたちに伝えていこうという意図や考えが強くなってきたことを理解できるだろう。

また、子どもたちの安全性や管理職の責任などを考慮して、子どもたちを授業外の活動に参加させてないということが伺える。このことから、H小学校では、直接体験を重視してないということが分かる。

引用文献

「中華人民共和憲法修正案」序言 1982年施行 2004年修正

「中華人民共和憲法修正案」第六節 民族自治地方の自治機関 第一百一十九条 1982年施行 2004年修正

烏蘭図克 『内モンゴル自治区民族教育の最大の問題、その原因及び対策』『民族教育研究』第2号 1997年

フレルバートル 「内モンゴル自治区の民族教育をめぐる諸問題」『言語・国家、そして権力』（田中克彦編） 新世社 1997年

黒崎未侑ら『中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル民族の生活様態と居住空間の変化—シリングル盟の移民村・都市近郊における遊牧民の事例調査から』 日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）2007年

第二節 H 小学校におけるカリキュラム

第一節において、H 小学校の紹介と H 小学校における民族文化の伝承について述べた。なぜ、学校で民族文化を伝統するのは大事なのかについて、内モンゴルのモンゴル民族文化の消失の状況と T 教頭先生のインタビューによって、その意図や価値を明らかにした。

本節で、前節を踏まえながら、実際に H 学校では、どのように大事にしているかを本校のカリキュラムを通して、検討してみたい。

近年までは、内モンゴルの民族小学校で教えている内容が民族の歴史・文化・伝統・生活習慣から離れた教育になりつつあると指摘されてきたが、最近になって民族の文化を取り入れていることが多く行われている。ここで、このような傾向が見られるようになったきっかけは、学校のカリキュラムだと考えられる。

第一項 学校の授業の開発

1999年6月の「中共中央国務院教育改革全面的推進素質教育の決定」で「課程体系、構成、内容を調整と改革し、新しい教育課程体系を創り、国家課程、地方課程、学校課程という三級課程を施行する」ことを公布した。

すなわち、国家、地方、学校の三段階の課程とは、異なる地区、学校と子どもの要求を満たすために、課程に対する国家、地方と学校の三級課程制度を実施するということである。中国教育部は基礎教育課程の管理政策を制定し、国家課程基準を決定し、科目の種類と時間を決定することとなった。各省（自治区）の教育行政部門は国家の課程管理政策と当地の実際にしたがって、各省（自治区）の国家課程の実施計画を制定し、教育部の許可の下で、各省（自治区）は省内（自治区）で使用する課程計画と課程基準を制定することができる。また、学校は国家課程を実施するとき、当地の社会、経済発展の状況、各学校の伝統と優勢、児童の要求に基づき、自分の学校に相応しい課程を開発し選択することができる」と決めた。

つまり、地方や学校課程の実施には教育理念や教科目標上、国家課程と同じだが、教科内容や指導活動、学習評価などを各省（自治区）・教師に任せるということになっている。

それでは、「中共中央、国務院教育改革全面的推進素質教育の決定」を受け、学校でどのような取り組みが始まったのだろうか。

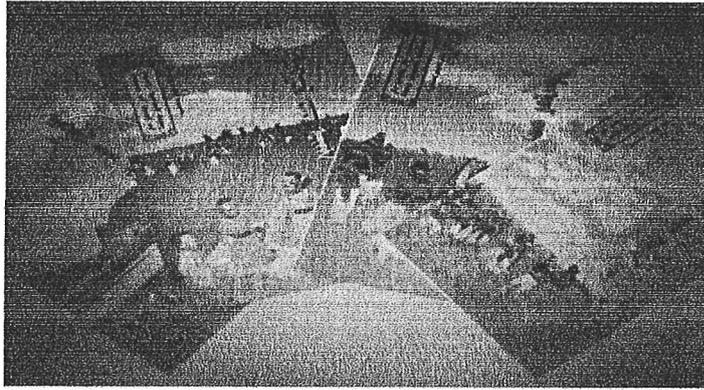
下は、H小学校4学年2組の時間割である。

区分	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
一限目	中国語(漢語)	モンゴル語	算数	中国語	モンゴル語	算数
二限目	算数	中国語	モンゴル語	モンゴル語	算数	モンゴル語
三限目	モンゴル語	算数	科学	算数	音楽	音読
四限目	音楽	モンゴル語	研学	英語	科学	英語
五限目	体育	書く(練習)	習慣	算数	中国語	
六限目	モンゴル語	図画	計算(練習)	品德	図画	
七限目	クラス会	体育	中国語	中国語	安全	

(4学年2組)

H小学校で、2003年から、習慣の授業を開いた。教材となる教科書が4冊あり、H小学校の教師が作成した。内容としては、主に、モンゴル民族の伝統的な文化、習慣、生活等が書かれている。絵も描いてあるので、子どもたちには理解しやすい。ここで、週一回の習慣の授業が入っていることは、本学校の大切にしている取り組みである。C教頭先生が言っているように、本学校の代表的な存在にも位置している。しかし、この習慣の授業はまだ全学年に渡って行われているのではなくて、2学年から6学年までの子どもたちを対象に行っている。時間数の少ないことと、子ども全員に渡ってないのが現状である。

「新課程計画」によれば、学校と地方の編成する教科時間数は10~12%を占め、他の国が編成する教科の時間数は88~90%を占めるということである。以下の写真はH小学校の教師たちが作った教材である。



教師たちが作った習慣の本

『モンゴル習慣』という教材は、グローバル化が進む今日、モンゴル民族の子どもたちに、民族文化を伝えていくことを目的とし作成した。具体的な内容としては、モンゴル族の長い歴史の流れの中で創り上げた生活知恵とモンゴル文化の基盤というのはいかなるものかを紹介している。

また、子どもたちに理解しやすくするため、教科書の内容に図を導入し、子どもの観察する力、考える力などを身に付けることに留意している。同時に、子どもたちは自分の知らない、分からないことを家族や故郷のお年寄りの人々から、聞いてもらうことにも留意している。本教材に含まれている内容は以下の通りである。ここで、取り上げたのは第三冊の内容の項目である。

『モンゴル民族習慣』（第三冊）「内モンゴル科学技術出版社 ト、ナソン（代表） 2003年」の内容の項目は以下のとおりである。

- 1、伝統家屋であるゲルについて
- 2、竈について
- 3、ユリカゴについて
- 4、しつけについて
- 5、お客さんの迎えならびに送り出す際の礼儀作法について
- 6、民族衣装や装飾について（男女別）
- 7、夏祭りである「ナーダム」について
- 8、生活の基盤である家畜について
- 9、家畜の乳搾りについて
- 10、肉や乳製品について

- 11、モンゴル料理について（ミルクティー、アマス・ボダー）
- 12、馬具について
- 13、牧犬について
- 14、猟及び猟の道具について
- 15、馬車や牛車について
- 16、脱穀機について
- 17、干支について
- 18、伝統行事である旧暦12月23日の「火の祭り」について
- 19、伝統行事である旧暦の大晦日や元日について
- 20、モンゴル民族の伝統的な玩具であるシャガーについて
- 21、民族音楽（馬頭琴や民謡）について

この項目をカテゴリー別に分類すれば以下に示すようになる。

伝統行事や遊戯：夏祭りであるナーダム、干支、12月23日の火の祭り、大晦日や元日、シャガー、民族音楽

食：竈、家畜の乳搾り、肉や乳製品、モンゴル料理

生活道具：馬具、馬車や牛車、脱穀機

命や生態系：家畜、牧犬、猟及び猟の道具

住：ゲル、ユリカゴ

礼儀作法：しつけ、お客さんの迎えならびに送り出す際の礼儀作法

衣：民族衣装や装飾

上記のカテゴリー別の項目の内容をみれば、第1に、伝統行事や遊戯に関する項目が多いことが分かる。第2に、「食」に関する項目が多い。第3に、「命や生態系」に関する項目が多いことが分かる。H 小学校では、教師たちが教材を作り、モンゴル民族固有の文化を子どもたちに学習し伝承していくため、取り組んでいる。第二項で、モンゴル民族の伝統家屋であるゲルを取り上げ、分析する。

第二項 H 小学校における授業実践及び分析

2011年9月23日(水) 学年:4年生2組 児童:31人(男13人、女18人) 教師:
R先生 授業:習慣 内容:ゲル 時間:5限目(14:40-15:20) 授業の流れ:映
像—ゲルの模型の説明—本を読む

ここで取り上げたのは、4学年2組の習慣の授業のエピソード記録である。

背景: 午後2時半ぐらい、子どもたちは寮から教室に入ってくる。これは、昼寝が終
わって午後の授業が始まる前の様子である。中国の学校では、小学校から大学まで昼寝が
ある。本学校で午後1時から2時20分の間は昼寝の時間帯である。

私は教室の一番後ろの壁に貼ってあった子どもたちの作文を見ていたが、何人かの子
どもが私のところ来て、「先生、こんにちは」と手を頭の上に上げて挨拶をする。その後、「私
〇〇、〇〇に住んでいる」と名前や自分の地元などを話していた。子どもたちと話してい
るとき、R先生が小さなゲルの模型を持って教室に入ってきた。模型を見た子どもたちは
騒ぎ始めて、次々と模型の方に集まってくる。子どもたちは、模型をじっと見たり、触っ
たり興味深い様子だった。

授業が始まる時間になり、R先生は子どもたちに向けて「授業を始めよう、子どもたち、
こんにちは」と挨拶をする。子どもたちもみんな立って、「教師、こんにちは」と言う。R
先生は「じゃ、座りましょう」と言い、授業が始まる。

ゲルの説明

R先生は「今回の授業で私たちモンゴル民族が暮らしていた、利用していた「ゲル」に
ついて紹介するが、先に、A 質問したいけど、みんなはゲルについてどのぐらい知っている
のか。何でもいから、自分の知っている点を述べてね」と言う。「家をフェルトで作
る、木で作る、色が白い…」と何人の子どもが答える。「ほかに、なんか知っている人い
るか?」とR先生は聞く。「テレビで見た、ビルの上にもゲルがある」と言う子がいる。
先生は「そうだね、みんなの言っているのは全部あっているよ、それでは、ゲルの構造の
名前を一個でもいいし、二個でもいいし、知っている人はいるか」と聞く。B 全員は無口
だった。R先生は子どもたちの様子を見て、「分からないようだね、まだ習ってないから大
丈夫だ。今回の授業で私たちが主に勉強する内容は、ゲルの組み立てや構造を理解するこ
とである。皆さんよく注意して聞いてね、来週の授業で誰かを指名するのだから、その時、
分からなかったらだめだよ。では、先に映像でゲルの組み立ての紹介を見ましよう」と言
う。

R先生は電子黒板で5分ぐらいのゲルの映像を子どもたちに見せる。映像で流したのは、主にゲルの壁の骨組み、梁を伸ばしている様子からフェルトで巻く、天井を覆うまでの様子であって、ゲルの完成の一連の制作だった。子どもたちは皆黒板を向き、映像を見ながら説明を聞く。R先生は子どもたちの様子をずっと見る。映像が終わった後、R先生は「ここで映したのは、ゲル組み立ての基本的な順番である。映像からも分かるように、ゲルは基本的に木とフェルトできており、組み立てが簡単に行える。草原で暮らす遊牧民にとって、ゲルは最適な住居だった。さっきも述べたように、C今はデザインとして、新しい形でビルとかの上にも建てている」と述べる。

D次に、R先生は持ってきたゲルの小さな模型を指しながら、ゲルの構造（ハナ、オニ、トオノなど）の名前や材料、作用を一個ずつ詳しく説明しながら、黒板に書いていく。例えば、ハーラガと書いて、昔はフェルトで作っていたが、今は木材でも作っている、ドアのことを指していると説明する。ハナ：枝で作った木組みで壁の芯になる。折りたたためて便利、フェルトで巻いていると説明する。R先生は時に「子どもたちに分かっているか」と確認する。ほとんどの子どもが「はい、分かっている」と返事したが、何人かの子どもがまだ分かってないみたいで声を出してなかった。それで、R先生は子どもたちの様子を見て、黒板に絵を描く。また、絵のところ、これがドア、ハナ、オニ、トオノを指していると字を書いて詳しく説明する。説明が終わった後、「この絵を見てみんなどう？分かった？」と聞く。子どもたちは「はい、分かった」と返事をする。

R先生は「次回の授業で、あそこのゲルに入って、具体的に説明する。残っている時間に皆さん本に載せてある内容、基本的な礼儀などを見ておき、分からない場合は聞いてね」という。子どもたちは本読みを始める。

コメント

AでR先生は、子どもたちに質問をしている。先生は質問を出し「子どもたちがゲルについてどのぐらい知っているかどうか」を把握し、授業を進めていくという考えや意図があったのではないかと考える。しかし、子どもたちは、色や木、フェルトで作ることしか分かってない。これは、校庭に二つのゲルがあるからこそできているのではないかと伺える。このことから、子どもたちにとってゲルは、遠さがっているということが分かる。

Bで、R先生はゲルの構造について、分からない子どもたちに対して、次の授業で誰かを指名するからと注意をさせている。ここで、指している「誰か」という言葉には、全員が含まれているという考えがあると感じられる。次回の授業まで、全員がゲルの構造を覚

えて理解してほしかったと思う。つまり、ゲルという民族の伝統家屋を理解してもらうことを大事にしているから、誰かという抽象的な言葉を使っているのではないかということが伺える。

Cで、R先生はビルの上に建てられているゲルのことを言い、元々草原にあったゲルが都市に入っていることを述べている。このことは、R先生がゲルは新しい形、デザインにも発展して、民族特徴・地域特徴を表していることを示唆しているのではないかと考えられる。

Dで、R先生は具体的な道具であるゲルの模型を指しながら、子どもたちに分かりやすく、印象深く説明していると感じた。また、分からない子どももいたので、R先生は絵を描いて、子どもたちがもっと分かるようにいろいろ工夫していると思う。



ゲルを教えている様子

この授業から、R先生は伝統家屋であるゲルを、子どもたちに分かってもらうように工夫していることが分かる。つまり、ゲル文化を理解してもらうように、取り組んでいる。しかし、子どもたちはゲルの基本的な内容しか分かってない。特に、ゲルの構造の名前は難しかったように感じる。これは、日常的にあまり聞こえないからと考える。このことに対し、R先生は模型や絵を使って、全員が分かるまで詳しく説明している様子が見られた。

本章で、中国における学校文化の実態、H小学校の事例を取り上げ、学校のカリキュラムやC教頭先生へのインタビューを通し、学校で民族文化を大事にされている価値を明らかにした。

終わりに

第一節 本研究の到達点

本研究で、学校文化は「学校で大事にされ、長い間受け継がれてきている価値観や行動様式」だと捉え、日本のS小学校と中国のH小学校を対象にして、事例分析を行った。研究方法としては、インタビュー、授業観察、合同検討会でのデータを用い、分析を行った。本研究で明らかになったことは以下の3点である。

まず、一つめは、日本のS地域では、かつて養蚕が盛んであったが、今ではほとんどなくなっている。そこで、S小学校では、地域の人々が昔、養飼育をしていたという伝統文化を守るために、地域の人々を直接招き、子どもたちに伝えようと工夫している。S小学校の場合は、この伝承していく活動そのものが価値であると考えている。地域の人々とつながることで、地域の人々が学校の活動に参加することができ、更に、子どもたちと一緒に活動することで、子どもたちに直接指導することができる。地域の人々が、直接子どもたちと接することで、子どもたち自身の文化に対する思いも高まると思われる。また、この活動が、単に養蚕の伝統文化を継承していくというのではなく、子どもたちがこの伝統文化にふれることによって、今後の社会で必要となる力が身に付くということが明らかとなった。

二つめは、今日の内モンゴル自治区において、モンゴル民族文化が消失しているという背景が見られる。そのなかで、H小学校では、週一回の「習慣の授業」を開き、教師たちが子どもに伝統文化を伝えていくような教材を作っている。H小学校では、民族文化そのものを大事にしている。C教頭先生のインタビューを通し、モンゴル民族の伝統的な文化を伝承していこうという意図や価値観が明らかとなった。

三つめは、両国のS・H小学校において、文化伝承（地域文化、民族文化）を重視しているが、S小学校では地域を通して伝播していく方法を取り入れている、これに対して、H小学校では教材を利用しているといった相違点が見られた。

S小学校の場合は、活動や地域とのつながりが中心になっている。その活動というのは、地域だけしかできない活動や体験を行っている。活動を通して、子どもの学びは生まれるが、活動後に、中国H小学校のように、教材などをつくることができれば、子どもたちの学びがより深まるのではないかと考えられる。

中国のH小学校の場合は、習慣の教材をつくるだけではなくて、体験活動も取り入れ、そして、地域の人や保護者を交えて、子どもたちと一緒に活動することによって、民族文化に対する考えが深まるのではないかと考えられる。

第二節 今後の課題

本研究では、日中両国の小学校において、文化伝承を大事にしているという共通点と伝承している方法とが異なっているということが明らかとなった。しかし、今後の課題としていくつかある。

まず、「学校文化」という言葉に含まれている内容は広い。本研究では、定義を価値観と行動様式に指定して研究を行った。日本のS小学校の場合は地域とのつながりを大事にし、地域文化を伝承しているところを見ることができたが、中国のH小学校の場合は民族文化を大事にして伝承しているところしか見ることができなかった。そして、学校文化の他の諸要素、例えば教師文化、制度文化などに触れることができなかった。また、S小学校の場合は地域とつながって行っている活動や学校独自（地域が参加しない）で行われている活動を区別して考察することができなかった。これらを今後の課題としたい。

次に、研究方法については、まだ不十分なところがある。

(1) インタビューについて

本研究で、S小学校では、R校長先生、N先生、H小学校ではC教頭先生へのインタビューにより、考察を行った。しかし、子どもたちや他の先生方はどのような価値や考えをもっているかについて把握することができなかった。

(2) エピソード記述について

S小学校では、蚕飼育活動、H小学校の場合はゲルのエピソードを事例とし、取り上げて分析した。しかし、教師の声かけや子どもたちの表情、言葉などについて丁寧に記録することができなかった。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々にお世話になりました。本当にありがとうございます。特に、日本S小学校のR校長先生、N先生、中国H小学校のC教頭先生には、深く感謝しております。そして、本論文を書くことにあたり、指導してくださった森脇 健夫先生をはじめ、ゼミの皆さんに心から感謝しております。ありがとうございました。